平成二〇年度　北九州市商学連携商業活性化支援事業

「旦過市場地域研究および活性化の拠点『大學堂』の運営」

大學堂と市場劇場

大學堂運営実行委員会

もくじ

序章　大學堂前史
旦過との出会い
大學堂の誕生
第一章　大學堂をつくる
昭和のトラップ大學堂
夜を徹した作業
そしてオープニング
第二章　旦過市場のコンセプトづくり
景観まちづくり的視点からの調査
人類学的視点からの調査
・常連のお客さんたち
「辻説法のおじさんの話」
「中国語仲間」
「唄う発酵食品研究者」
「たまに酔いどれ将棋指し」
「投げキッスの貴婦人」
「お謡いの先生」
・一期一会のお客さんたち
「靴とともに歩いた人生を聞きそびれた話」
「魔女のお客様」
「テンガロンハットが似合う各国放浪の男性」
「ルー大柴おじさん」
「物々交換」
「幸せについて考えるお客さん」
「コミュニケーションを考えるひと」
「お金持ちのお客さん」
・遠方からやって来たお客さんたち
「雲の上の旅行者」
「異国の旅行者の食道楽」
「ぞうさん」
「フランクなバイクおじさん」
街の縁台
旦過という場がもつ力

第三章　店舗紹介マップ・パンフレットの作成
店舗紹介マップの試み
観光と教育のプログラム
大學堂のパンフレット
第四章　新商品の開発
大學丼の誕生
きっかけはうなぎ
どんぶりをもって歩き回る店長
食市食座デビュー
今後の計画
第五章　大學堂を活用したイベントとワークショップ
くろねこのたんがを探せ
韓国伝統郷土料理「グァメギ」の試食会
創作書道会「楽墨会」
さわやかな草笛教室
夏の寺子屋
第六章　市場を大学に、大学を市場に
全国への展開
視察と交流
メディアによる情報発信
利用客の新地開拓
海外からの利用客
第七章　大學堂を動かすもの
イチバのなかの大學堂　覚書
イチバという場所
「大學堂」という名前
「大學丼」という白い「余白」
丼と火、そして大學堂
大學堂という力
終章　大學堂はなにを「活性化」するのか

序章 ◆ 大學堂前史

（竹川 大介）

◆ 旦過との出会い

北九州市立大学への着任のため一九九六年に初めて小倉の街に赴いた。新居を探すために不動産屋の車に乗って市街地にでたときの驚きは、今も忘れられない。車は、おそらく小倉城あたりから東に向かい、そのまま書店クエストを過ぎ、神嶽川にさしかかっていたのだと思う。

突然、川の上に家々が立ち並ぶ不思議な風景が目の前に飛び込んできた。一瞬の出来事だった。あれはいったいなに？ここは日本？すぐにたしかめるすべもなく、車は急ぎ足でそこを通り過ぎていったのであるが、新しい暮らしへの期待と不安が入り交じったその時のわたしには、あまりに鮮烈な印象が残った。

まもなくして、その街が旦過と呼ばれていることや、北九州一帯の生鮮食品が集まっている場所であること、海に接する魚河岸として古くからの町並みをとどめていることを知る。

わたしは小倉に居を構え、小躍りをするような気持ちで旦過市場を歩き回った。

地元に住んでいるひとにとっては当たり前の日常風景が、遠くからやってきた者にはひとつの奇蹟を見るように思えた。学生時代、わたしは友人たちと京

都の街でJR西日本のフリーペーパをつくっていた。取材のため京都の街を歩き、古く良いものを探し当ててはその雑誌で紹介する、そんな記事を書いていた。戦火を逃れた京都にはさまざまな時代の遺産が今も息づいている。しかし、旦過市場はそれらの町並みにまったく負けない強烈な個性を発揮していた。

旦過市場は本州ではほとんど知られていない。新しく住むことになった街に宝物を発見したわたしは、以来、小倉を訪ね来るひと、来るひとを旦過市場に案内した。文化や歴史に興味がある友人たちは、誰もが驚き、不思議がり、そして喜んでくれた。

大学でのわたしの専門は人類学である。人類学者は、しばしば自分の住む場所を離れ異文化を体験しながら、「人間とはなにか」を考える。これは未知の生活を自分の中で再構築する過程で、今まで信じていた常識や価値観を疑っていく、とても時間のかかる作業である。こうした人類学者の社会調査の手法は、ふつう参与観察とかフィールドワークとか呼ばれている。

フィールドワークの手がかりを探すためにいつもわたしが最初にのぞくのが、その土地の市場である。市場に行けば、そこの人々がなにを食べ、どんな暮らしをし、どんな言葉を話すのかが一度にわかる。食文化に興味があり、太平洋の各地で漁師の調査をしてきたわたしのような人類学者にとって、市場はとても相性がよい。

北九州の市場も生きた教材であった。いつの間にかわたしはフィールドワークに興味をもつ学生たちとともに、生鮮食品の小売店の集合体である「市場」の調査を始めていた。二〇〇〇年のNTTホームページ「北九州市場トレッキング」の委託業務を皮切りに、大学の講義を利用しておこなった年末の旦過市場での社会調査実習、特別研究推進費による市場の調査など、北九州一円の市場で話を聞いて回った。

その結果、かつての産業都市の名残をとどめる北九州には、全国でも類を見ないほどの市場が残っていることがわかった。そのほとんどは店主の高齢化に歩調を合わせるように衰退の一途をたどっているが、それでも地域のホットスポットとして独特な存在感を誇示していた。

やがて研究を深めていくうちに、経済学や社会学や行政学、都市工学のひとたちがしばしばおこなう定量的なアンケート調査ではとらえることができない、多種多様な人間が集まる生々しい市場の姿が明らかになっていった。

市場の中には数字を用いた経済効果や消費活動の常識を無視するかのよう

な店が、数多く見られた。一日の売り上げがほとんどないお店、お店のひとがお客さんとお昼ご飯を食べるお店。たとえばこうした店は、あたかも個人宅の居間が街の中に出現したような状態になっており、話し好きの店主は採算性というよりは、人付き合いに重点を置いて店を開いているのであった。ここまで極端ではないにせよ、多かれ少なかれどこの店舗も、顔の見える個人個人の関係性の中に、どっぷりと埋め込まれていた。

市場は、新しいショッピングモールやスーパーマーケットと異なり、客も店主もそれぞれ自分の歴史をちらりと見え隠れさせながらそこに集まっていた。それは数字の上にはほとんど表れることのない都市における市場の役割であった。フィールドワークの専門家として人類学を学ぶわたしたちは、こうした人々や店舗を「個体識別」したうえで、調査や議論を進めていった。

二〇〇五年には市民を対象とした北九州市立大学公開講座として、初めて学外を使った市場の実践的な連続講座をおこなった。市場のひとにも講師を依頼し、物を買うこと売ることを通じて、たとえば「値切る」という行為が買う側だけではなく売る側にも利益があることを実地で学んだ。

この時の受講生たちが集まって旧過市場で初めて模擬店を出したのが、その翌年の二月に小倉の繁華街でおこなわれた食市食座である。「大學堂」という名称が初めて使われたのもこのときである。「大學堂」は当初の予想をこえて繁盛し、学生たちの力を市場のひとたちも高く評価してくれた。

学内でおこなわれる大学祭とちがい、ここに来るお客さんは、たまたま通りがかった一般の人々である。こうした外部

に目を向ける経験によって、大学の中とは異なる動機を生み出した。これを機会に旦過市場のひとたちとつながりができ、以後二年間にわたり「大北九州市場学会」という名称で、学生と店主と大学教員が集まる市場の企画会議を毎月一回ずつおこなうこととなった。この会議は旦過市場のみならず北九州全体の市場のありかたを考えるものであった。

この会議からも多くのイベントや企画が実施された。「大北九州イチバ劇場」もそうした企画のひとつである。終日にわたってひとつの劇場に見立てられた旦過市場を舞台に、名古屋からきたバリ舞踊集団「スルヤ・ムトゥ」とバリ音楽集団「スアラ・スクマ」が通りを練り歩き、東京からきた「さすらい姉妹」は路上で芝居を繰り広げた。昔から市場に通っているひとたちからは、「かつての旦過の賑わいや子どものころわくわくした市場

九州フィールドワーク研究会・大北九州市場学会がこれまでおこなった主なイベントと社会調査

ＮＴＴ	2000/2-2000/3	NTTホームページの業務委託	北九州の市場の広域調査とウェップサイト北九州いちばトレッキング作成
社会調査	2000/1-2001/3	社会調査実習	年末の市場のお店にひとりずつはいり調査をおこなった。
特別研究	2004/12－2005/3	平成16年度特別研究推進費研究	「北九州市における、市場を中心とした街共同体の再構築」北九州市に数多く残る市場を調査し、市場の役割を再検討した。
公開講座	2005/11－2006/1	北九州市立大学公開講座	旦過市場にて、北九州市立大学の公開講座「北九州市場大学」開催。旦過市場からは近藤光孝氏を講師に迎え、市場を題材にした公開講座をおこなった。
食市食座06	2006/2/5	食市食座	旦過市場にて、昭和初期の趣のある「大學堂」を開店。大学芋やアジア粥のほか講義、歌を販売。またアジアや昭和を連想させるような衣装が雰囲気を盛り上げた。
小倉祇園	2006/7/16	キャラクターくろねこのたんが	小倉祇園祭で御披露目
小倉祇園	2006/7/16	小倉祇園にドームみこし	
	2007/1/10	手拭い作成	食市食座にむけて商品開発
市場劇場	2006/7/1	大北九州市場劇場	旦過市場を舞台に演劇「さすらい姉妹」二回上演。バリ島の舞踏と音楽の行列一回。
食市食座07	2007/2/18	食市食座	昭和の仮装コンテスト
エコライフステージ	2007/10/1	商品開発	エコライフステージにむけて旦過ふろしきを作成
エコライフステージ	2007/10/20	ノーマイカーデーイベント	横山夫妻エコバッグ講習・ガリバン実演ワークショップ

の雰囲気を思い出すようだった」といううれしい感想をいただいた。思えば市場を劇場に見立てるコンセプトは、このときにひとつの確信を得たのである。

昭和劇場のコンセプトも、「くろねこのたんが」のキャラクターも、市場学会のなかで発案され、その後、大學堂に引き継がれたのである。

◆ 大學堂の誕生

長い前置きとなってしまったが「大學堂」の事業は、この市場学会から生まれたものであり、こうしたいきさつは、以下の報告を読み進めるために重要な手がかりとなるだろう。「大學堂」は、先に衰退した市場の再生ありきではなく、市場の魅力にとりつかれた人々が、その可能性に期待してうまれたプロジェクトである。それは決して後ろ向きではなく、むしろ前向きで戦略的な構想であった。

今の旦過市場にとって、もっとも必要な物やふさわしい物ってなんだろう。旦過市場には全国で通用する魅力が隠されているが、これを外に向けて発信していくにはどんな方法があるだろうか。自分たちで店を持つという動機が生まれたとたん、市場の店主たちと議論してきたさまざまな企画は、今まで以上に現実味をもってわたしたちの前に立ち現れた。

近年になって大学と地域が連携し、商店街や過疎地を大学や学生たちの力で盛り立てていくというような、街づくりや活性化事業を見聞きすることが多くなった。また、学生に限らず商店街にアートを持ち込んで活性化を図ろうとするアーティストのイベント企画も多い。しかし、わたしたちの大學堂はこうした取り組みとは、一線を画しているように思える。「街づくり」という語感に、どこか違和感をおぼえるのである。

大學堂の役割は、支援でも再生でも街づくりでもない。わたしたち自身が当事者になり、当たり前の日常風景を、異文化研究を専門とする人類学の知見を利用して、どう見立てなおすかのかというものであった。

市場と大学の相乗作用は、衰退した商店街の経済的な活性化や若者を街に連れ戻すといった表面的な目的だけにとどまるものではないはずだ。ボランティアや一部の積極的なひとの献身によっておこなわれる事業には、おのずから限界がある。なによりも市場そのものが、ひとりひとりの店主の強烈な自立性によってドライブしているのだから、わたしたちもそこから学ばなくてはならない。つまり、わたしたちも強烈な店主を目指すのである。

「旦過市場にお店を持つ」、それはわたしがこの街に最初に来たときからあたた

めていた、夢のアイデアであった。都市が持つ複雑な人間関係と文化的多様性を学問の中に持ち込むこと、経済や政治や福祉といった既存の枠組みにとらわれない総合的な研究の拠点をつくること、それが成功するとすれば、その場所は市場しかない。おそらく日本でも他に類を見ないユニークな試みが旦過市場から始まるという予感がわたしにはあった。

後で詳しく述べるとおり大學堂は、古い昭和の町屋のイメージを意識的に作り、まるでジオラマのような舞台を用意している。そして店長になったメンバーは、その日の店づくりの全責任と全権利をもつというシステムをとっている。なにを売ってもいいし、なにを見せてもいい。肝心なことはその経済的効果ではなくて、その人間関係的効果である。

大學堂のあらゆる仕掛けは、ひとが集まる「街の縁側」としてこの場所が最大限に機能するようにつくられている。市場の本質を異なる文化を持つ人々が交換する場所として考えるなら、物を売ることと同じくらい、おしゃべりをすることも重要な要素であると考える。コンビニやスーパーなど無駄な会話を排除した効率的な経済空間の対極にあるのが市場であり大學堂なのである。

さて、それでは今年度の大學堂の事業計画に沿って、大學堂はどのような場所であり、そこでなにがおきたのかを具体的に見ていくことにしよう。

第一章 ◆ 大學堂をつくる

（進　麻菜美）

◆ 昭和のトラップ大學堂

旦過市場内にある空き店舗に初めて入った四月二五日。ここは空き店舗だが、毎月一日と二五日のみ北九州青果が野菜販売促進のためのイベントを開催していた。その終了後に、わたしたちは中の様子を見ることができた。

全体の雰囲気は、白い壁と白い蛍光灯のせいでやけに明るい。部分的によく見ると、天井の一部は穴があいており、穴を塞ぐために発泡スチロールと木の棒があてられている。床は水平でないうえに、コンクリートがはがれた破片が周辺に散乱していた。その床には汚れたL字型の溝があり、一部分だけダンボールとガムテープで覆われている。そしてその天井と床をつなぐように、配水管パイプ二本と柱三本が中途半端な位置に設置されていた。長い間空き店舗であったこの場所を使うには、単純な改装では済まない状態であった。

商店として利用するのであれば、店内の明るさは大切であるが、わたしたちはむしろ照明を抑えたもっと暗い空間をイメージしていた。ギラギラ、ピカピカした明るさは、この市場にはなじまない。ふつうの店舗とはちがう発想で旦過らしさを追求したい。それが昭和の家屋を思わせる畳と土間のある、懐かしくてくつろげる空間であった。昔から旦過市場の中にあったかのような、そんな店を作るために、わたしたちは内装を自分たちの手でおこなうことにし、調度品まですべてを注意深く選択した。

全体のイメージパースを絵が得意なメンバーの田畑が描いた。昭和の博物館として有名な愛知県にある北名古屋市歴史民俗資料館の学芸員、市橋芳則が書いた『昭和路地裏大博覧会』を参考にした。建築の知識を持つ大久保が店内を実測し、必要な資材の見積もりを出した。さ

らに実際の改装に至るまでには、家主である「ハローディ」との話し合いがあり、また今までこの店舗でイベントをおこなってきた北九州青果との打ち合わせがあった。こうした手続きに時間がかかったために、オープニングの二週間前になってようやく着工のめどが立った。作業に使える時間は限られている。毎日およそ一〇人あまりのメンバーで、市場のお店が閉まった午後六時頃から、夜を徹して改装作業をおこなうことになった。

そしてこの改装のために三人のプロを小倉に招いた。棟梁として改装時の全指揮を任せられたのは通称バットさん。現在、福岡の大名で古道具屋を営んでいる。彼は水族館劇場の舞台美術を担当しており、昭和の時代考証には造詣が深い。また、鎌倉からは同じく水族館劇場の舞台美術担当でありふだんは映画のセットの仕事をしている高橋明歩さんが、東京からは舞台大道具担当の近藤史晴さんを招いた。

この水族館劇場とは、桃山邑が中心となって一九八七年に旗揚げされた野外劇団である。大掛かりな特設テントを組み、数トンにも及ぶ水を用いた演出をすることや、馬や梟などの本物の動物を劇中に登場させることなどで知られている。二〇〇五年に北九州でおこなわれたNOSTALGIA「月と篝り火と獣たち」公演で、竹川大介を制作団長に九州フィールドワーク研究会のメンバーが制作に参加して以来、新しい公演ごとに裏方や役者として交流がつづいていた。

どうせ作るのであれば中途半端なも

のではなく、納得のいく空間をつくりたかった。小さなこだわりの積み重ねがあってこそ、大學堂の魅力が生まれるのだと考えていた。それだけではない。舞台のプロの仕事を目の当たりにして、わたしたち自身、ものを作るということの楽しさを深く知ることができたのである。

◆ 夜を徹した作業

それでは、このとき大學堂ではなにがおこっていたか時間を追って見ていくことにしよう。

六月二一日、改装にむけて畳六枚とふすま二枚と長さ三メートルの角材四本が店舗内に搬入された。これらは自宅を改装している方から、実際に家の中で長年使われていたものを譲ってもらったのである。手間がかかっても古い素材の持つ雰囲気を大學堂に生かしたかったのだ。

六月二三日、改装初日。高橋さんと近藤さんが来る日である。改装を始めるために、事前に準備しておいた機械や、購入しておいた木材を搬入した。まるで、そこに引越しのように一気に大量の資材が運び込まれた。引越しといえば、近隣の商店への挨拶も忘れてはならない。「向かいに新しく入ることになった大學堂です。数日間は工事でお騒がせしますが、これからよろしくお願いします」と旦過市場の新参者として挨拶回りをした。準備が整い、ふたりが到着したその夜の二一時、いよいよ改装作業が始まったのである。

大きな音やペンキのにおいなどが周囲

の商店の迷惑になることを避けるため、毎日の作業は基本的に夕方から深夜にかけておこなわれた。

ガガガガ　ドドドド　コンコン　ギーーー

静まり返った夜のアーケードの中に、とんかちやのこぎりの音とわたしたちの声が響く。改装のために初日に集まったメンバーは二五人。わたしたちは大工ではないし、知識も技術もまったくない。指示が出せるのはプロのふたりだけである。ひとは大勢集まったのだが、狭い店舗内で全員が改装作業につくのはむずかしく、効率がわるかった。当然、手が空くひとが出てくる。すると、自然発生的に炊き出し部隊が結成され、その横では沖縄出身の照屋が三線を手に唄う。また、あるひとは店ができていく貴重な過程を記録に収めるべくカメラを回した。

炊き出し部隊による大量のおにぎりと、響き渡る歌声はその場にいる全員にとって大きなエネルギーとなった。実際に大工作業をするひともしないひとも、ただ指示を待っているだけでは単なるアルバイトとなにも変わらない。そのような発想ではいいものは生まれない。「その場になにが必要か」を各自が考え、動くことによって改装作業は進んでいった。

六月二五日、改装三日目。高橋さんと近藤さんに遅れること二日。ついに棟梁バットさんが到着した。バットさんは、作業中の内装を見るなり「こんなものつくってどうするんだ！！」とその場にい

た全員を一喝した。彼の昭和初期の家屋イメージは、わたしたちがつくり進めてきたものとちがっていた。妥協は許されず、作ってきた壁のやり直しが命じられた。「二日間かけて作ったのに…」と落胆したが、いわれたとおり釘を次々と抜いていった。

やり直しを命じられた部分は、居間にあたるところであった。わたしたちは一面に木の壁をつくっていたのだが、バットさんの指示で漆喰をイメージした加工を施し、そこには最終的に柱時計がかけられることになった。バットさんが昭和初期、つまり戦前の時代にこだわりをもっていたのは、戦前と戦後ではものの質が全くちがい、戦前にこそ質のいいものがあったからだ、と後に語ってくれた。自分が関わるからにはいいものを作りたいという、バットさんの意気込みを感じた。実際には気づかないひとが多いかもしれないが、美は細部に宿るのだと私は思った。

旦過市場で大學堂の改装を進めると同時に、トタンの加工や掲示板作成など、狭い大學堂では作業しにくいようなものを北九大でつくりあげ、旦過に運び込んでいった。

改装にあわせて大學堂オープニングイベントの準備も進められていた。中でもこのイベントのためだけに結成したチンドン屋「珍計画」は、早い段階からメンバーを募り、大学の中庭や、夜中の旦過市場で練習を繰り返した。若松でチンドン屋にたずさわっている北九大の学生に指導者として参加してもらい、七月七日のイベントに備えた。また、チンドン屋の衣装については水族館劇場に依頼し、東京から発送してもらった。限られたメンバーが一人二役をこなしながら、オープニングに向けすべてが同時に進行して

いった。

作業は深夜におこなわれることが多かったため、わたしたちは毎日大學堂に泊り込んだ。改装中は旦過市場が生活の場となったので、必然的に食料調達は市場内でおこなわれた。昼間はあまり作業ができないため、用事がなくても市場を歩いたり店をのぞくこともしばしばだった。大學堂に住み込み、毎朝シャッターを開けて「おはようございまーす」と中から出てくるわたしたちのことを、市場の人々は訝っていただろう。しかし汚れた作業着で買い物をしていると、「あそこの学生さん?なにができるの?」と次第に店の方に声をかけられるようになり、また「これ、みんなで食べなさい」とおまけをしてもらったり差し入れが届くこともあった。

「差し入れ歓迎」という札を立てた。そして気づけば、毎日たくさんの差し入れをいただき、あいさつだけではなく自然な会話を交わすようになっていた。

市場はひとともひとが関わる場所であると最初に気づいたのは、オープニング前のこのときだった。

現在も大學堂のメンバーの多くが、それぞれ旦過市場の中に顔馴染みの店を

もっている。店がオープンする前からわたしたちと市場のひとたちの関係は始まっていた。内装を自分たちでつくろうと、ホコリだらけになりながら作業する姿や、大學堂が日に日に完成する様子を、市場のひとも目にしていたのである。おそらく見守るようなはらはらした気持ちだったのだと思う。毎日顔を合せ、働く姿を見てきたことで徐々に信頼関係が作られ、それが開店した後も今なおつながっているのだと思う。

◆ そしてオープニング

七月六日、内装がだいぶ整ってきたころ、ついに大學堂の象徴ともいえる看板ができあがった。オープニングの前日である。この看板も既製品ではなく糸鋸を使った手作りで、立体感を出すための影と、少し古く見せるためのエイジングの加工が施されている。看板を表に掲げる

際には、景気づけのプレイベントとしてひとを集め、その様子は新聞にも掲載された。しかしこのとき全体的には予定よりも作業が遅れており、オープンに間に合うのかという不安が常にあった。バットさんや高橋さんは滞在期間を予定より延ばして作業にあたってくれていた。

オープニングの前夜、それまで散乱していた工具や木材の破片を片付けると、一気に大學堂が広く感じられた。オレンジ色の電球が灯り、縁台の奥に敷かれた畳の上には丸いちゃぶ台が置かれた。そのとき初めて自分たちがしてきた仕事の全貌を見ることができた。今できあがったばかりなのに、もうすでに懐かしい。誰もがそう感じる不思議な雰囲気である。

七月七日、こうして様々なひとの協力のもとつくりあげた大學堂は、市場内だけでなく、新聞、テレビなどのマスコミの注目を浴び、「小倉かまぼこ」特製の紅白かまぼこによる、テープカットならぬ「かまぼこカット」で堂々と世間の人々の前に姿を現したのである。

マチグワ三線コンサート
七月七日七夕◎正午
旦過大學堂オープニングイベント
琉球のちゅら星
照屋優海

◆ 2008年7月7日大學堂オープン ◆

第二章 ◆ 旦過市場のコンセプトづくり（吉岡　美紀）

大學堂に先立つ大北九州市場学会の会議の中で「昭和の劇場」という旦過市場のコンセプトは固まっていた。そこに集まる人々がそれぞれ役者として人生を演じるひとつの劇場。このコンセプトを具体的に実現する方法を考えていくために、今年度は旦過市場に実際にどのようなひとが訪れているのかを調査した。

市場の調査は、通常、商店主を中心におこなわれることが多いが、今回の調査ではあえて、市場を訪れる客にターゲットを絞り、それを類型化した。

調査では、統計を使った社会工学的な手法と、聞き取りによって事例をあつめる人類学的な手法をもとに、市場でデータを取っている。現時点では両者のデータのすりあわせはおこなっていないが、将来的には、さらに多様な視点からの総合的な調査を進めていきたいと考えている。

◆ 景観まちづくり的視点からの調査

この調査は、九州工業大学の建設社会工学科景観工学まちづくり研究室の栗山喬らによって、大學堂や市場の出入り口などを拠点に六回にわたって、一二七名のお客さんを対象におこなわれた。研究では、旦過市場を訪れるお客さんが市場をどう利用しているかを把握することが目的の一つとして挙げられている。以下、その調査概要および分析結果の一部を示す。

お客さんに対するアンケートは左図の調査シートに基づいて行われた。さらにこの聞き取り調査の結果について、主成分分析（数量化三類）およびクラスター分析がおこなわれた。本報告書では詳しい分析手法および分析過程は省略し、分析の結果明らかになった旦過市場を訪れるお客さんを五つのグループに分類したものの名前および特徴を示す。

グループ一『生活習慣型』（四五人）

グループ一は四五人のひとが含まれており、全体の一二七名に対しては約三五パーセントの人数を占めている。被調査者が常連店として名前を挙げた店舗のうち、このグループに含まれるひとが名前を挙げたのは全体の約五割であった。また、常連店も市場内の各業種においてまんべんなく持っており、一人あたりの常連店数も平均よりも多い。つまり、毎日の生活の繰り返しの中で自然な習慣として旦過市場を訪れ利用しているグループであると考えられる。

旦過市場商店街『常連さんインタビュー』

No.

1. 旦過市場にどれくらいの頻度で来ますか？また小倉のまちにはどれくらいの頻度で来ますか？

→ 年（　）回 or 月（　）回 or 週（　）回
→ 年（　）回 or 月（　）回 or 週（　）回

2. いつも旦過市場にはどのくらいの時間いますか？小倉のまちにはどのくらいの時間いますか？

→（　）時間 or（　）分
→（　）時間 or（　）分

3. 旦過市場に初めて来たのはいつですか？（＋age）

→（　　）年 or（　　）ヶ月 or（　　）週間

4. 旦過市場に来られるときの交通手段を教えてください。小倉のまちに来られるときの交通手段を教えてください。（＋place）

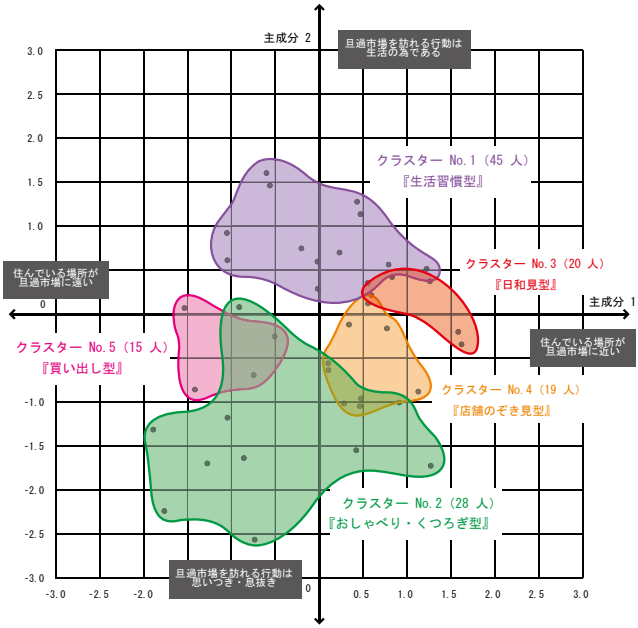
→ 自家用車 ・電車 ・モノレール ・バス ・徒歩 ・その他（　　）
※ 自家用車は停める場所、バス・電車・モノレールは乗り場 → （　　）

5. 旦過市場に来る前に行った場所と来たあとに行く場所はどこですか？

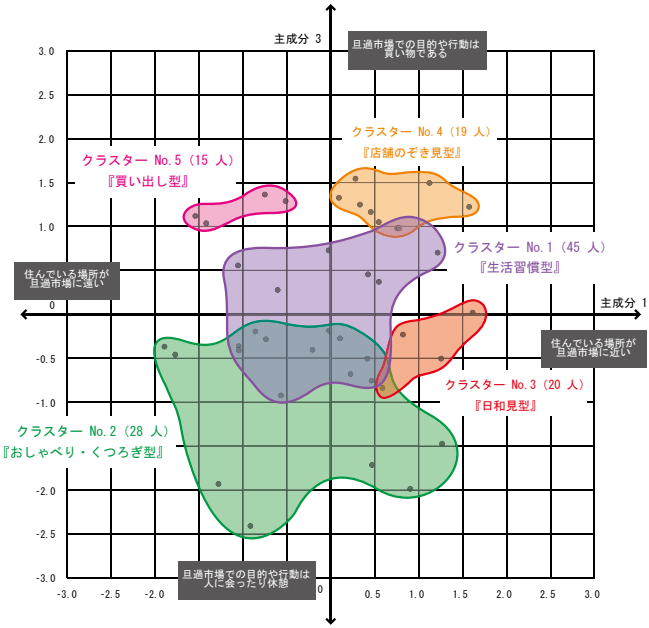
→（　　）→旦過市場→（　　）

6. 旦過市場でのあなたの顔馴染み（常連）のお店はどこですか？また、そのお店にはいつもどれくらいの時間いますか？

→（　　）・（　　）時間 or（　　）分
（　　）・（　　）時間 or（　　）分
（　　）・（　　）時間 or（　　）分
（　　）・（　　）時間 or（　　）分
（　　）・（　　）時間 or（　　）分
（　　）・（　　）時間 or（　　）分



【 主成分得点図（主成分 1× 主成分 2)】



【 主成分得点図（主成分 1× 主成分 3)】

グループ二『おしゃべり・くつろぎ型』（二八人）

グループ二は常連店以外で過ごす旦過市場での滞在時間が長いということが共通している。半分近くのひとが常連店を持っておらず、また常連店を選ぶ嗜好性においてもほとんど共通している事項がない。つまり、旦過市場内にいる時間は長いのに、常連店をもっていなかったり、ひとと同じ店舗を選ぶことが少ないという点が特徴としてみられる。そのため、旦過市場のなかで、思い思いに自分の時間を過ごせるような相手や場所を見出しているグループであると考えられる。

グループ三『日和見型』（二〇人）

グループ三に含まれるお客さんは、全員が旦過市場への来訪頻度が高く、かつ全体の平均を上回る常連店数を持っている。旦過市場内でしばらく休憩したり歩き回ったりといった傾向もみられる。また、住んでいる場所が旦過市場に近く、気が向いたときに気構えなく旦過市場へ訪れている。旦過市場を訪れることが暮らしの中での気軽な息抜きになっていると考えられるグループである。

グループ四『店舗のぞき見型』（一九人）

グループ四に属すお客さんは旦過市場内での滞在や特定の店での会話に時間を費やすことはあまりない。買い物だけ済ませてすぐに市場を出たり、もしくは旦過市場以外の小倉の場所で用事があり、その通り道や寄り道として旦過市場を利用している可能性がある。旦過市場への来訪頻度は高いといった特徴はみられるが、旦過市場内の特定の場所とのつながりは弱く、買い物やコミュニケーションといった行動もあまりおこなっていないグループであると考えられる。

グループ五『買い出し型』（一五人）

グループ五に含まれているお客さんは、旦過市場への来訪頻度が低く、常連だと思う店舗も持っていない。息抜きや観光のために旦過市場を訪れ、買い物したり市場の様子を短時間見て回ったりしている。旦過市場を訪れることが生活のうえでなくてはならない行動というわけではなく、非日常の体験になっているグループであると考えられる。

データから、グループ一、五に属し、買い物だけを目当てに訪れるお客さんの数は全体の一部を占めているに過ぎないことがわかる。旦過市場を訪れる多くのお客さんは買い物だけを目当てにしているわけではなく、息抜きや気分転換などを求めてやって来ており、そうした人々が市場の賑わいを支えていると考えられるのである。

この分析結果は、経済効果から商店街をとらえようとする従来の街づくりに対し、新たな視点を示している。たしかに

市場は機能的な側面だけをとらえれば、必要なものを買うための商業施設であるが、同時にそれは日常的な習慣であったり、時間をつぶすための居場所であったりと、そこを訪れるひとの生活やあるいはそのひとが今まで生きてきた軌跡と切り離すことができない。

最初の章で、市場に集まるひとたちは、顔の見える個人個人の関係性の中に、それぞれ自分の歴史を見え隠れさせているとあるが、この研究は、滞在時間や市場までの移動距離など計測可能なファクターから、こうした目的のちがいを類型化できることを示しており、今後の市場のあり方やイベントを考える上でひとつの手がかりとなるだろう。

（参考文献）

栗山喬、仲間浩一（二〇〇九年）『利用パターンと意識からみる場所とひとのつながりに関する基礎的研究―北九州市小倉北区旦過市場を例として―』、九州工業大学工学部建設社会工学科景観工学まちづくり研究室修士論文

◆ 人類学的視点からの調査

では、続いて、実際の大學堂で聞き取りをおこなったお客さんたちの姿を紹介したい。大學堂は、買い物以外のなにかを期待した人々が話をし、話を聞き、話に参加することを目当てに集まる場所という一面を持っている。調査では参与観察という手法をとり、とくに質問項目を決めず、こうしたお客さんとの自然な作業や会話から印象に残った事例を記録している。

大學堂ではその日の店主がその日訪れたお客さんのエピソードをまとめており、そのデータは膨大な量になっている。これらのデータの中からいくつかを抽出し列挙した。紙面の都合で実際の会話の

内容はかなり省略してあるが、こうした事例からも、顔が見える存在というものがどのような意味を持つのかが明らかになるだろう。

・常連のお客さんたち
「辻説法のおじさんの話」

（命婦　恭子）

男性店長が編み物をしている姿は、男女を問わず高齢のお客さんの注意を引く。この男性も、この日一緒に入っていた男性店長である木下のそんな姿に惹かれるように大學堂に入ってきて、昔は男女が口をきいただけで殴られていたと話し出す。話は、ただの昔話には収まらない。日本で左利きが市民権を得たのは王さんが世界一になったから、情報を表面だけ見ていると情報に踊らされる、教科書通りに中国語を勉強していても現地で会話は成立しない、など次々に広がる。工場などを設計するお仕事をされていたそうで、広い中国の三分の二を回ったという経験の持ち主。声も身振りも話のスケールも大きく、辻説法という言葉が浮かんでくる。大學堂の中を向いてしゃべっているよりも、むしろ市場に向かっている姿のほうが似合いそうだった。

「中国語仲間」

（有松　由衣）

そのひとはわたしが店長をしていた日にふらっと大學堂に立ち寄った。話が盛り上がり、その流れでわたしが中国語を専攻していて去年中国に留学していたと話すと、とても興味を持ってくれた。そのひとも中国語が好きで中国には何回か旅行に行っているそうだ。雲南省に旅行に行くならどこがいいか、という話題に花が咲いた。それ以降何度も大學堂に来てくれるようになった。大學堂で会う度に、「次はいつ来るの？」「質問いっぱいもってくるからね！」とわたしと話をするのを楽しみにしてくれているようだ。ご自身で本などを使って中国語を勉強されているらしく、勉強をしているうちに気になったことを書き留めて、「この表現はよく使うの？」「こういう表現ある？」とたくさん質問をしてくれる。勉

強熱心な姿に刺激を受けるし、自分が興味あることについて一緒に話せて、とても楽しい。

「唄う発酵食品研究者」

（原口　勇希）

そのひとが初めて大學堂を訪れたのは、たしか開店まもないころだった。旦過市場近くの医療センターの帰りにふらりと訪れてくださった。六〇から七〇歳代だと思われる。何日か後に素人のど自慢大会に出場すること、そこでは「小倉の五木ひろし」と呼ばれていること（そのときに歌声も披露してくださった。五木　ひろしのようにしゃがれてはいなかったがささやくような歌声だった）、発酵食品の研究を趣味でやっていることなどの話を聞いた。それから即席浅漬けを教えてもらったり、不思議な縁を感じる出来事もあり、現在もよく大學堂を訪れてくださっている。

「たまに酔いどれ将棋指し」

（原口　勇希）

六〇代の男性。将棋を指しに来ていた。最初に会ったのは前段の発酵食品研究者と同じく開店まもないころだったと思う。そのころは世間話をしていただけだったが、来はじめて一ヶ月ほどすると、近所に住む好敵手に勝つための練習と称して、ふらっと現れては将棋を一局指し早々と帰るというスタイルが定着してきた。そのため身の上話などを改めて聞いたこともなく、今もって彼は将棋のひとというイメージから離れない。たまにお酒をひっかけて来られることがあり、その時ばかりは顔がほんのり赤く世間話が説教…いや、叱咤激励の色を帯び始める。どこかの大学を出たらしいが北九大ではないとのこと。最近見かけないが、練習の成果は出たのだろうか。

「投げキッスの貴婦人」

（原口　勇希）

彼女は大學堂が開店してすぐに訪れた。七〇代から八〇代の女性である。なんでも、知り合い何人もから大學堂のオープニングの日のＮＨＫのニュースに映っていたと聞いて、その放送分の映像はないかと訪ねてきた。何日か前にＮＨ

Kから放送分をまとめたDVDが送られてきていたのでそれをコピーして後日渡すと喜んでくださり、隣の肉屋のチキンと投げキッスをくれた。その後も何回か大學堂を訪れて、つい最近まで旦過界隈の婦人会の仕事をしていたこと、だからこの辺で知らないひとはいないことなど、話をしてくれた。ご高齢であるにも関わらず非常にきびきびと話し、以前は看護婦かなにかの仕事をしていたらしい。話し好きで、大學堂にお客として来るよりも旦過のお店で立ち話をしている姿をよく見かける。声をかけると必ず大學堂への差し入れと投げキッス（手の甲にチュウの場合もあり）をくださるのでうれしいやら恥ずかしいやら。

「お謡いの先生」

（皿海　弘樹）

二月の食市食座、大學丼イベントと北九州青果の試食イベントでごった返す大學堂にそのひとはふらりと現れた。「ここは何ですか?」という定番の質問をされ、「ここは北九大と旦過市場の共同事業で…」という定番の返事をする。これまで何度もいってきたやりとりだ。見た目は六〇代の男性で、旦過市場ではよく見かける年格好のお客さんではあるが、そのときわたしにはなにかがちがって見えた。大學堂にとても興味を持ってくれたことだけではなく、目つき、話し方などから気品のようなものが感じられたの

である。とにかくわたしは店内に入っていったそのお客さんに話しかけてみることにした。相変わらずお客さんがごった返す店内で話を聞いたのだが、謡曲の先生であることがわかった。能舞台やどこかのホールで謡曲を謡っている写真を見せていただいた。本格的に謡曲をされているらしい。なんでも三〇年ほど前から始め、今ではお弟子さんを抱えており、年に一度発表会をおこなっているという。店内で謡曲の発音表などが書いてある大きな紙を拡げ、少し謡っていただいたのだが、芯まで響くような素敵な声をしておられた。気がつくと他のお客さんも注目していた。話は謡曲だけにとどまらず過去のお仕事のことにまで及んだ。小倉の高校で歴史を教えながら北九大で英語を学んできたらしい。知識の広さを感心していると、いつの間にか謡曲の先生の歴史の授業が始まっていた。島根の苗字に「百」という文字が多いのは百済の影響がある、日本の文化は大陸からの影響をかなり受けている、などかなり興味深く、勉強になる内容だった。そしてなにより歴史を教えている姿はとてもいきいきとしており楽しそうだったのが印象に残っている。

昔は歴史を教え、今は謡曲を教える、まさに先生という職業が天職なのだと思う。どちらもひとに教え、伝えることで育まれ、永続してきたものだ。近々また謡曲を教えてもらう予定であるが、この永続性の伝播媒介の一部としてわたしも関われることが嬉しく、また楽しみで仕方がない。

・一期一会のお客さんたち

「靴とともに歩いた人生を聞きそびれた話」

（命婦　恭子）

ふらりと現れた男性は、「この辺に靴の修理をしてくれるところはないですか？」と切り出した。このとき大學堂にいた三人の店長は、誰も靴の修理屋があるのかどうかも知らず慌てる。「四〇年履いてる靴なんですよ」「ぽうぽう歩きました」ぽつぽつと話される話をつなぐ

と、旦過にある履物屋さんも、神戸にある修理屋さんもご存じ。しかも、靴のかかとにはすでに立派に修理された跡がある。どうやら靴の修理に関しては、わたしたちよりもよくご存じの様子。で、男性が話したかったことは?靴とともにほうぼう歩いた四〇年。昔はたくさんいた職人が消えてしまった小倉城下。男性の物語の最初のほうにはそんなお話が書いてあったようである。でも慌てたわたしたちはうっかり物語とすれちがってしまった。

「魔女のお客様」

（金子 有季）

大學堂に来るお客様のほとんどは、お喋り好きなおじいちゃんおばあちゃんである。「今日も寒いねー。あら、火鉢があるやないの。懐かしい。ぬくいねえ。やっぱり火鉢はいいねえ」華やかさはないけれど暖かな会話。わたしの場合、パワフルおばあちゃんの話になかなか口を挟めず、相槌を打ってばかりなのだけれど。

そんなある日、四人の美人なお客さんが来店した。四人揃っていかにもお金持ちで美しい身のこなしは只者ではなさそうだ。三〇代後半～四〇代後半といったところだろうか。来店の理由は大學堂に興味を持ってとのことだったので、どういう場所であるのかを説明した。

大學堂の話も尽き、会話の内容は、いよいよ興味津々の四人の正体についてに移っていった。医者か弁護士のセレブな奥様集団か?「おほほほ～」わたしの推測は笑いで軽く受け流される。どうやらちがうようだ。

はたまた高級クラブのママなのだろうか。「おほほほ～」またしても受け流される。そんななか最年長のマダムが、「わたし年金もらってるのよー」の一言。

「えぇ～!!」と驚きを隠せなかった。三〇代か四〇代と推測していたのだが、六〇歳を過ぎているとは予想外である。なにか若さと美しさの秘訣があるにちがいない。何でもそろっている旦過市場、

年齢不詳の魔女のような彼女たちの秘密は、市場内のどこかに隠されているのかもしれない。

「テンガロンハットが似合う各国放浪の男性」

（原口　勇希）

その男性は毎日の日課である散歩のついでにたまたま通りかかった大學堂にふらりと訪れた。六〇から七〇歳代だろうが、頭には白いテンガロン帽、上半身は白いポロシャツに身をつつんでいて、昔スポーツで鍛えていたのではないかと思わせるほどにがっしりとした体格の持ち主であった。大學堂の内装をひとしきり眺め、近くのお客さんとの会話に相槌をうったりしていた。

しかし、いざ喋り出すと最近の日本人は着物を着なくなった、アメリカの文化に毒されている、と痛烈な日本文化批判が始まった。その喋りの勢いと体格に圧倒されて次第に相槌も忘れて小一時間。「でもそんな日本に現在も住み続けているわけですよね?」とかろうじて質問をすると、「そりゃ家族がおるからね」とさらっと答えた。

お、やっとこの男性の家族や背景について聞けるぞと思った瞬間、話は南米大陸へ行ったときのことに移ってしまい、結局男性自身のことについてはなにも聞けないまま、男性は大學堂を後にした。

「ルー大柴おじさん」

（吉岡　美紀）

格好もしゃべり方も雰囲気も年齢もルー大柴のような男性が来た。大學堂が気になった様子で、店の前に張り出している看板やチラシや黒板を見ながら、しきりに「ここはなんだろう」とか「はー、うんうん」とか大きな声でひとりでつぶやいていた。店内の椅子に座っていたわたしと目が合うと、「ここは…結局なんなわけ」と訊いてきた。

大學堂について一応の説明をすると、少しだけ中に入ってきて「はあはあ、それで中に入ると売っているものもありますよというわけね」と勝手にひとりで納得している。説明したばかりのことを言われ、しかたなく「…そうですよ」といったが、耳に入っていない様子である。自身の言葉に納得して「かしこまりー!」といって出て行った。ぜんぜんかしこ

まっていない。彼はまさしくルー大柴のようなひとであった。

「物々交換」

（有松 由衣）

ある日大學堂で芋を焼きながら表を行き交う人々を見ていると、先を急いでいる様子の五〇代くらいの女性から、「焼き芋？これ、生の芋と交換してもらえますか？」と訊かれた。わたしが「いいですよ」と答えると、女性はダッシュで芋を買いに走っていった。

大學堂に置いてある多くのものは、訪れた方との物の交換、贈り物で成り立っている。例えば、元々大學堂には古風な小さいちゃぶ台を置いていたのだが、「これ欲しいなぁ」といってきた男性と交渉の末、男性のこたつ机と交換したのだった。そして、今、そのこたつ机に掛かっている花柄の毛織物のこたつ布団は、また別のある日訪れた女性からいただいたものである。

そんな風に、わたしたちは大學堂にいると、物をもらったりあげたりすることが多く、大學堂の特徴として物と物が交錯する場であることを面白がっていた。

しかし、焼き芋と生の芋とを交換して欲しいとは、初めての申し出である。焼き芋は売り物として売っていたので、客としては値段をたずね、数百円（焼き芋はほとんど生の芋と同じ値段で売っていた）を支払い買った方が早くて楽な気がする。ところが、女性は交換するための生の芋を買いに、再び市場の喧騒に戻り、八百屋を目指したのである。

どの八百屋で買った芋であるか、このとき女性には特に告げなかったのだが、数分後、彼女はわたしが芋を買った八百屋で同じ種類の芋を買って戻ってきたのだった。

そこで、女性の生の芋四つと、わたしの焼き芋二つとを交換することでお互いに合意し、女性は嬉しそうに焼き芋を手に帰っていった。

女性はなぜ、焼き芋を買うのではなく、生の芋との交換を選んだのだろうか。彼女はわたしたちが焼いていたのと同じ芋をなにも訊かずにわかり、持ってきたところがヒントになりそうだ。おそらく、彼女も市場に入って店先を物色しなが

ら、あの芋に目をとめたにちがいない。「小ぶりで食べやすそうな大きさ、焼き芋にしたら美味しそう」と思いつつ、焼き芋にするのは時間かかる、もうちょっと考えようかしらという逡巡をして、また歩き出した。すると大學堂の店先で、さっきの芋がほかほかの焼き芋になって売られているではないか。彼女はただ焼き芋が欲しかったのではなく、あの八百屋さんの芋で作った焼き芋が食べたかったのだ。

どんな芋でもいいわけではなく、わたしも素敵と思ったこの芋だからいいのよ、という彼女の気持ちが、焼き芋に対して代価を払うのではなく、同じ芋をまた返す、というこの行動に表われているのではないだろうか。

わたしたちはふつうに暮らしていて、お店で物々交換をおこなう機会はほとんどない。わたしたちが食べているもの、消費しているものは、たいていが取り替え可能なレディメイドの商品である。本来は不揃いであることが自然である野菜や鮮魚にしたって、スーパーマーケットに並ぶときには規格外は省かれてならされて、きれいにそろえられている。どこをどう切り取っても均質なものは、当然交換する意味も楽しみもなくなってしまうのだ。そんな暮らしはつまらない。そう気づかせてくれるのが、この旦過市場劇場で毎日繰り広げられている人々の営みなのだ。

突然、持ちかけられた焼き芋と生の芋との交換。わたしは交換してもらった生の芋を再び炭にくべる。大學堂に集積した古道具のように、今この芋は若干の来歴を背負って特別に見える。物々交換とひとの幸せについて、大學堂では日々考える出来事が多い。

「幸せについて考えるお客さん」

（大津留　香織）

大學堂には、休憩するひとと荷物を整理するひとがたくさん立ち寄る。この日は、「休憩させてください」と、五〇代前後の女性が、静かに端っこの椅子に座っていた。すると、同じくらいの歳で、小奇麗な格好をした別の女性がやってき

て、荷物整理を始めた。その女性は、こたつに入っているわたしと松原を見止めて、「こんなところ（旦過市場）で、お婆さんみたいにこたつに入ってても、彼氏なんかできんよっ」と、わたしたちの将来を心配して話しだした。

「うーん、こんなところに来るようなひとに、出会いたいのです。そこらへんのショッピングセンターをうろうろしているようなひとよりも、旦過市場に興味をもって、大學堂を訪ねてくれるような、そんなひとのほうが面白くて、すてきだと思う」、そう返すと、「こんなところを通るようなひとは、お金持ってないよ。あのね、なんだかんだでね、お金を持ってるひとがいいのよー」と、しゃきしゃきと人生観を語り帰っていった。

すると、端っこで静かにお茶を飲んでいた女性が、「そういうけどね、世の中は、お金じゃないと思うのよ」と、こたつに上がってきて話し始めた。「勤めていたころは、働くことが楽しかった。高度成長期で、お給料が次の年には、二倍になっていたから。でも、お金では、本当の満足は得られないと思う」と、わたしたちは三人でこたつを囲み、幸せとはなにか、延々と語り合った。

大學堂に来るおじさんたちの多くは、女の子をみると人生や将来についてアドバイスせずにはいられないらしく、女性の幸せは結婚であるとか、いろいろ話してくれる。しかし、常連さんではない女のひとと、人生や経験や、幸せといった抽象的な題材について話すことは稀だった。幸せについての話がひと段落すると、彼女は自分の息子さんの話をしてくれた。

息子さんは高校進学と同時に、頭を丸めて仏教の学校に進学したと教えてくれた。お母さんの心残りを、引き継いでくれたそうだ。中学を卒業してすぐに親元から離れ、山に篭って修行しているという。目の前の女性がどんな気持ちで送り出したのか、わたしには想像することしかできない。彼女は「そこに通っている子は、みんなふつうの子と変わらないのよ、冬は一面雪景色できれいだから、遊びに行ってあげて」と、軽やかに笑った。

「コミュニケーションを考えるひと」

（大津留　香織）

大學堂を訪れるひとのなかには、年齢の予想が難しいひとがたくさんいる。その日も、五〇代か六〇代で、リュックサックにキャップを身につけた男性が、不思議な場所、大學堂に惹かれてやってきて、明晰に語り出した。

まず、大學堂においてある火鉢を見止めて、コミュニケーションについて話した。昔は、家のひとが火鉢の周りに集まって、そこで色々な話をした。つまり、火鉢がコミュニケーションツールとなって、家のひとの情報交換・ふれあいの場所として機能していたという。現代は火鉢が消え、家の中でひとが集まるものといえば、テレビしかない。しかし、一方的に外の情報を提供するテレビジョンという機械が、コミュニケーションツールとして機能するわけがない。テレビなんか見ていたらだめになる。などと話し合っていたところ、郵便屋さんが、お手紙を持ってきてくれた。店長のわたしが縁側から「ありがとうございます」と受け取るのをみて、お客さんはとても驚いていた。いわく、顔の見える関係が成立していることに感激したそうだ。現代では顔の見えない関係がふつうになっていることを、そのひとは問題視しているのであった。

このひとは、わたしたちが大學堂でしたい本当のことをわかってくれるかもしれない。お客さんは、大學堂が持つ可能性や、人類学と九州フィールドワーク研究会に、とても興味を持ってくれて、自分の老後のあるべき姿を見つけた、と言ってくれた。大學堂が、誰かの人生に大きく関わった瞬間に、わたしは立ち会っていた。しばらくネパールに滞在する予定らしく、日本のODA活動を批判し、ODAがもっとできることについて話した。名前も告げずに帰ってしまったが、次に会うときは、お客さんではなく、一緒に店長をしているかもしれないと思った。

「お金持ちのお客さん」

（大津留 香織）

おじいさんは大學堂の椅子に腰掛けると、自分のことを話したいんだと言って、笑った。おじいさんは九州一の資産家で、市によく寄付をしているらしい。

以前、市に数千億円寄付したが、一向に表彰状が送られてこないので、請求の電話を掛けたことがあるという。「お金は手に入ったからね、今は名誉が欲しいんだよ。あんたたちもね、ちゃんとお金を稼いで、夢を実現しなさいよ」。このおじいさんの夢は、福祉を充実させることだという。現在は福祉施設を作って、市に寄付することを考案中だそうだ。

市に任せないで、直接運営したほうが、夢の実現に繋がるのではないかと言うと、そうしたいひとがいればすべての資金を出してもよいが、知り合いにはいないとこぼした。

わたしはそのとき、夢とは果たしてお金で買えるものなのだろうかと考えた。夢を実現するために必要なものは、お金ではないのではないか。何事にも、予算はなくてはならないかもしれない。お金がよりたくさんあるほうが、好都合な場合がほとんどであることも事実だと思う。しかし、知識と意欲と、協力してくれる友人がいなければ、お金があっても「夢」は実現しないような気がした。

「夢」とはお金で買えるような、準備されて整えられているコースやセットのようなものだろうか。もしそうであるならば、その実現の見返りは、現場に身を置いて初めて見られる他人の笑顔ではなく、額縁に入った賞状をながめるガラスに映った自分の顔だけではないだろうかと、おじいさんが帰ってからも、しばらく考えていた。

・遠方からやって来たお客さんたち

「雲の上の旅行者」

（木下靖子）

ある夏の日の大學堂、千葉から「小倉を見に来た」という二〇代くらいの女性が貸し自転車を颯爽と漕いであらわれた。この女性は東京に勤務しており「雲のうえ」を青山ブックセンターで手に入れて読むのが楽しみでという。見ると、手には市場特集の号の「雲の上」が握られている。旦過市場が見たくって、本当に空を飛んで来てしまったのだ。期待を裏切らない旦過の喧噪、市場の匂いに、「来てよかった」と笑みをもらす。

次なる見所を尋ねられたので、門司港のカボチャドキヤ国立美術館を案内した。後日、無事に美術館に辿り着き、画家トーナスカボチャラダムスの笛演奏まで鑑賞いたしました！というメールをいただいた。雲から下りると市場曼荼羅という旅のお話である。

「異国の旅行者の食道楽」

（木下靖子）

ある冬の日の大學堂、台湾から「九州を見に来た」という旅行者たちがやって来た。総勢八名の家族旅行。一番年長者の老夫婦は日本語を少し話す。彼らが市場にやってきた目的は、旬の海の幸のお刺身。大學堂お向かいの魚屋さん「佐川鮮魚店」で真剣に物色をする一団。新鮮なものは新鮮なままに食べてこそと、大學堂で食べていただくことになった。

鮪、赤貝のお刺身が運ばれ、待ち構えるひとたち。彼らは、わたしたち大學堂のメンバーにも食べなさいと、「お刺身は身体にいいのだから」とまで語り勧めてくれた。

この日のメインは、特上の豊前一粒ガキ。舌鼓を打ち「好吃（おいしい）」と感嘆し連呼する。このようなものを食べられてこそ、旅に来た甲斐があったよとフクフクと微笑む老夫婦。旦過市場に関心を持つ異国からの旅行者は多い。彼らは自分の嗅覚をたよりに市場を散策し、大學堂でしばし休憩を楽しんでいく市場の達人である。

「ぞうさん」

（吉岡美紀）

旦過市場には旅人も多く訪れていて、時々大學堂はそういったひとたちの止まり木となる。ある日ご飯を食べようとしていると、体になじんだ感のある紺色の作務衣、くたくたの帽子、大きくふくらんだリュックサックという装いの、書道家のようなひとが現れた。恰幅がよく、男のひとにも女のひとにも見える。年齢は不詳。おそらく六〇歳くらいであろう。

格好と行動から見て、観光で来たお客さんではなく、旅の途中においしいものを買いに市場に立ち寄ったひとだと推測した。

旅人ってなにかおもしろいネタを持っているにちがいないし、堂々としているわけではないのだが、ひとの世に慣れた余裕がにじみでる風貌であったため、ぜひ話したいと思い、「書道家ですか?」と声をかけた。すると、帽子をゆっくりとおじぎするようにとり、坊主頭を見せ、にっこりと笑いかけてきた。

尼さんであった。自らを「ぞうさん」と呼び、全国を旅するのが好きらしい。隅の椅子に腰掛け、市場内で買ってきたイカの刺身四パックを白飯と一緒に食べはじめた。自分も一緒にごはんを食べながら話しはじめたのだが、話題は尽きず、他のことが見えなくなる程に話にのめり込んだ。

旅先での話題はもちろんだが、「死」にまつわることを主に話した。ぞうさんは元看護士であり、現役当時から霊的なものが「見える、聴こえる、感じる」ひとだったらしく、そのせいか、ある時虫が死んだ瞬間に虫の魂がはじけたのを見たという。動かなくなった虫から青白い光が空中にたちのぼり、はじけたのを見て、それは虫の魂がなにか別ものの魂に変わる瞬間だと感じたという。虫が輪廻転生したと強く感じたという。

「それは虫の魂が死んで、はじけて、無になった瞬間だったのではないですか。虫の魂が無に等しいほどに分散した瞬間なのではないかと自分は思います」とかえすと、「いや、わたしはちがうものになった瞬間だとはっきり思った。はじける瞬間に、生命って輪廻転生するものなんだと感じた」という。

他にも、各地で泊まるホテルで出会う

霊との会話や過去の職場での不思議体験、自身の霊感、ひとのオーラ…。

わたしは霊的なものを見たことも聴いたことも感じたこともないので、ぞうさんが見て聴いて感じる霊的なものを含んだ日常を実感したり、それによって得た見解を同じように持つことはできない。しかし、ぞうさんという人物がちがう世界の見方をし、そのちがいから生まれる彼女なりの見解を、どう持って生きているかを知ることができたのがとても嬉しかった。

「フランクなバイクおじさん」

（皿海弘樹）

八月のある暑い日、「よっ！」とまるで親戚のおじさんが正月に集まった子どもたちにあいさつするかのような、また居酒屋で同僚にばったり出くわしたかのような軽いあいさつでひとりのおじさんが入ってきた。三〇度を越す暑さの中、長袖の赤いシャツを着て、薄い無精髭をはやしたなんとも言いがたい、強いて言うならフランクな感じのお客さんだった。

ラムネをおいしそうに飲み干すと、かなりのハイペースで彼の話が始まった。彼は今、バイクで日本中を周っており、北海道から実家のある長崎に戻る途中で北九州に立ち寄ったらしい。「俺のバイクは…」「東京でヤクザに絡まれて…」「新潟のゲストハウスで恋に落ち…」など、彼の話はまるで暴走するバイクのように止まらない。しかも気がつくと隣の「肉の勉強屋」の店長がうんうんとうなずきながら話に入っており、話はさらに長くなる。すべては書ききれないので心に残った話を書く。

わたしが「なぜバイクなのか」と質問すると待ってましたと言わんばかりに輝いた目で「自分が自分じゃなくなる感覚がするんだよ！」とかなり大きな声で話しだした。よく考えると話の中に「みんな旅行と言ったら電車とかバスみたいな居心地のいいもの使うよねー」とか「正直バイクは結構辛いとこもあって…」など理由を聞いてくれというメッセージが込められていたのであった。気づくのが遅くなったが、わたしはみごとワナにかかったのだ。

「バイクは車とちがってダイレクトに風を受けるし車よりずっと景色が綺麗に見える、まるで自分自身が猛スピードで走っているかのような感覚になって、スピードを上げれば上げるほど日常から離れた非日常な世界に行けるんだよ」と語る。

そのとき、このおじさんは大學堂の非日常さに惹かれて来たのではないか、と思えた。市場の中にあるこの非日常な風

景が、自然と非日常なものを求めるひとを呼び寄せており、お客さんが入ることでこの不思議な風景が精錬され完成されていくのだ。

ひとしきり話をすると満足したのか「じゃあな」と言い、立ち去っていった。たった一度の出会いである。

◆ 街の縁台

以上が、来客記録から抜粋したいくつかの事例である。大學堂を続けていくうちに、当初予想していた以上にさまざまなひとが大學堂に立ち寄り、おしゃべりをしていくことがわかった。これは大學堂の雰囲気そのものに人々を集める力があるのと同時に、街の中で多くの人々、特に高齢者たちが言葉を語る場所に飢えている現状をみてとることができる。

お客さんの問わず語りがはじまると、店長である我々はじっくり耳を傾け、時に自分の見解を述べたりする。こうした話や議論を通じて、語り手自身の「ひと」というもの、自分自身の「ひと」というものが見えることがある。訪れる人々を「来客数」とひとくくりにまとめ、数的なデータばかりに目を向けていては、こうしたひとのあり様というものは見えてはこない。

「街の縁台」と名乗る大學堂は、イベントや物品の販売のみならず市場を軸とした街のフィールドワークの調査拠点として実に有効に機能している。大學堂に持ち込まれる個人の歴史や物語の多様性に驚くと同時に、こうした記憶を旧過市場の再評価や事業に生かす方法はないだろうかと考える。続いて調査から得られた資料をもとに旧過市場の目指すべき方向性について議論してみたい。

◆ 旦過という場がもつ力

大學堂は旦過市場の雰囲気に合うよう、昭和初期をイメージして造られている。旦過市場の建物自体は戦後建てられたものであるため、大學堂がモデルとしている時期との若干のずれはあるものの、市場の主要な利用者にとって、建物の雰囲気は昔の記憶を呼び戻すためのひとつのきっかけとなっている。

きっかけを与えられた人々はまるで役者のように若い頃の自身を演じ始める。旦過市場に訪れる人々が、語るべき物語を持ち、それを語る場所として大學堂がある。そうして、旦過市場全体が一つの劇場のような装いを呈し、大學堂は物語が展開する特設の舞台となるのである。

前節の事例が示しているように、大學堂では年齢も訪れる目的も異なる人々と出会い、話をすることができる。人々はふらりと大學堂に入ってきて、おもむろに自らのライフヒストリーを語り始めたり、旅先での体験話や体験から得た自らの見解、政治や時事問題など諸々に関する意見を語っていく。大學堂のメンバーとのおしゃべり以外に、見知らぬお客さんどうしの会話も盛んである。

賑わう市場の中、大學堂で静かにお茶を飲む。商売熱心な掛け声が響く中で、雑談に笑い声が響く。時間に従順な人々が

わき目もふらず過ぎ去っていく横で、お客さんと濃密な会話を交わす。市場の他の店舗とも少しちがったそんな大學堂に、物語を持ったお客さんたちが磁石に引き寄せられたように自然と集まってくるのである。

旦過市場の大通りを歩いてみると、「大學堂」、その場所がぽっかりと昭和初期の家庭の風景を演じている。また立場を変えて大學堂から旦過市場の人通りや各店舗の仕事風景、井戸端会議風景を眺めてみても、そこにはかつてあったはずの日常風景が演じられているのである。

ただ買い物のためにお客さんが市場を訪れ、店主と商品について話をしている様子ひとつとってみても、現代では失われつつある「生きられた市場」としての顔が旦過市場にはある。今のわたしたちの日常では、スーパーマーケットやコンビニで経験するような、人工的に規格化され、どこに行っても変わり映えのない品物と、わたしたちが持ついくばくかの金銭とを、ただ交換するためだけに必要な、マニュアル化された表面的な会話が延々と続けられている。客も店員も機械のようにその手続きを遂行する。

しかし市場では店主とお客さんそれぞれが巡る季節に身を置きながら生活を抱え、日々入れ替わる商品とさまざまな日々の会話やおまけの交渉を経た上でようやく金銭との交換がなされる。商品と金銭との交換にはとどまらず、お客さんは仕入れ先の情報や料理方法、旬や獲れ高について、また時には個人的な好みや品物の用途によって自分の生活に適した情報を得、店主はそれに応え、お客さんの生活につき合っていく。そうすることで人間関係が築かれ、人と人としての関わりが生まれる。

現在では少なくなったこうした風景

が、大學堂や旦過市場には残っている。無意識のうちに、かつての昭和の暮らしが思い出されその頃のやりとりが擬似的に再現されているのかもしれない。巨大なビルが周りに建てられ、道や河川が整備される中で、トタン屋根や茶色く錆びた壁、継ぎはぎだらけのアーケードは、そのものがひとつの劇場の雰囲気を醸し出している。

おはいりあれ

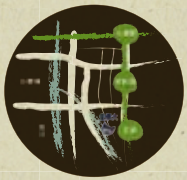
大學堂にひとが入ってくるたびに、まるで舞台に役者が登場するような緊張と期待を感じる。顔の見える関係、客が持つ歴史の多様性を実感することができる。この意味で、旦過市場はまさしく「昭和劇場」なのである。

大學堂の概要

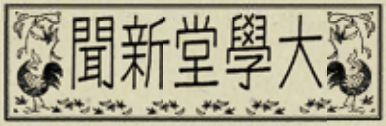
「大學堂」は「昭和劇場・旦過」のコンセプトのもと、懐かしく居心地の良い空間を提供しています。気軽に立ち寄りおしゃべりができる場所として、旦過市場とともにだれもが訪ねる北九州の名所になってほしいと願っています。旦過市場は地域の商業拠点であるだけでなく全国に類を見ない水上マーケットです。そうした意味で、観光や学術的にも注目すべきスポットであり、「大學堂」はこれら資源を最大限に利用できる有力なフィールド研究の拠点となります。「大學堂」では、はじめての観光客の方でも楽しめるようにお情報発信をおこない、定期的なイベント、展覧会、商品販売などを通して、市民と大学の交流の場を創っ

事業の目的

本事業は「大北九州市場学会・大學堂運営実行委員会」を母体に、旦過市場商業協同組合および北九州市立大学の商学共同事業として情報発信拠点「大學堂」を運営するものです。「大學堂」は大学の教育研究の場としての活用とあわせ、旦過市場の活性化と若者層や観光客への知名度の向上を目的のひとつとしています。小倉の魚河岸として町とともに発展してきた旦過市場には古い歴史があり、近隣の生鮮食品が集まる商業拠点としての優れた潜在力を持っています。しかしながら、全国的な知名度はまだ十分に高いとはいえず、利用層の高齢化が進んでいるのが現状です。「大學堂」事業では、旦過市場の地理的な利便性を活用し、大学教員や学生たちのアイデアを吹き込むことで、新しい街づくりを実践する文



www.daigakudo.net



一日店長の特別メニュー
日替わりでつとめる大學堂の一日店長がその日の特別メニューを用意して皆様をお待ちしています。

「大學堂」会場利用
大學堂は文化の発信拠点です。講演・演劇・音楽・展示の場所として、大學堂をお貸しいたします。ファーマーズマーケット、手作り商品の委託販売も受け付けます。

「大學堂」観光プログラム
旅行やお仕事の合間に小倉の台所、旦過市場に足を運んでみませんか？国内ではかに類を見ない水上マーケットの新鮮な山海の幸が賑わい物情騒然。大學堂では、旦過市場の見どころ、買い物情報をお伝えするとともに初めてのお客さんのために市場観光のガイドも承ります。

「大學堂」教育プログラム
総合学習や社会科見学に旦過市場を利用してみませんか？市場でどんなものが売っているかな、物を売ったり買ったりするのをみてみたい、市場の人たちの講演、自分たちで物を売る模擬店、見学だけでなく、より実践的な教育を大學堂がお手伝いします。

「大學堂」調査研究プログラム
市場は人の交差点です。大學堂には研究者が集まっています。人間関係から経済学まで、多岐にわたるフィールドワークの拠点として大學堂をご利用下さい。資料や人の紹介など地の利を生かしたサポートで協力いたします。

最新のイベント情報および各種利用料金はホームページもしくは大學堂までお問い合わせください。

大學堂は九州フィールドワーク研究会（野研）のメンバーが中心となって運営しています。九州フィールドワーク研究会は、自然や文化に興味を持つ人々が集って、国内や海外で古まざまな活動をおこない、そこで得られた知恵を伝え合うサロンです。

連絡先
北九州市小倉南区北方４－２－１
北九州市立大学　竹川大介研究室
093-964-4167
ホームページ
http://www.apa-apa.net/yaken/index.html
入会の申し込みは上記サイトの
「メンバー登録」のページから

第三章 ◆ 店舗紹介マップ・パンフレットの作成（竹川 大介）

◆ 店舗紹介マップの試み

大學堂は、旦過市場のメインストリートのちょうど真ん中あたりに位置する。モノレールの駅から最も近くにある細い路地との三叉路の角に立地しており、旦過市場を訪れるひとたちの目の触れやすい場所のひとつである。

こうした立地を生かして、旦過の情報ステーションとしての機能を果たすことができるのではないかと考えた。最初に試みたのが、日々のお買い得情報を紹介するマップを作り、毎日掲示板に掲示しようという企画である。

あらかじめ各店舗にその日のおすすめの品を短冊状の紙に書いてもらい、毎朝それを回収しては大學堂の前に立てかけた掲示板に貼るというのが、店長の日課となった。

実際に始めてみると百軒を越すすべての店舗の情報を集めるのは、予想以上に大変な仕事であり、かつ店の前に十分な掲示スペースをとることは難しかった。積極的に協力してくれるお店や、この掲示板を活用するお客さんはいたが、継続的に続けるためには、もう一つ別の仕掛けが必要であると感じた。

しかしながら、この企画を通じて、新しい店舗である大學堂の存在は市場の人々に浸透し、日ごとに変わる大學堂の学生と市場の店主たちとのつながりは急速に強くなっていった。大學堂が旦過市場のひとつのお店として認知されるためのステップとして、店舗紹介マップの企画は重要な役割を果たしていた。

◆ 観光と教育のプログラム

一方で、旦過を初めて訪れる観光客や、市場の情報を知りたいと考えるお客さんにとって、学生たちが店主として常時滞在している大學堂は非常に立ち寄りやすい場所となった。大學堂の方からもこうした方々に対し積極的に働きかけるため、「観光」「教育」「調査研究」の三つのプログラムを用意し、ホームページなどで広報した。

これらのプログラムは小倉の街の観光スポットとしての旦過市場の活用と、教育や調査研究の場所としての利用を呼びかけるものであった。日経新聞の調査で北九州市立大学が地域貢献において全国一位の実績を持つことが報道され、その一端を担う大學堂にも全国から視察の取材の依頼が増えた。実際にこうした視察の際もこれらのプログラムは活用されている。

運営が始まってまだ日が浅いために現時点では担当するメンバーやコンテンツが充分であるとはいえない。今後、さらにこうしたプログラムの内容を充実させ、社会見学や体験学習など、地域の小中学校の授業カリキュラムの中にも取り入れられるような枠組みを作っていく必要があるだろう。

◆ 大學堂のパンフレット

週末の旦過市場には、全国から出張や観光で北九州を訪れる人々が増える。こうしたお客さんは、限られた時間で小倉や旦過市場を楽しむための情報を求めている。そして不思議そうに大學堂の店内をのぞき込むのである。

「ここはなんですか?」、この問いを日替わりの店長たちは、何度聞いたことだろうか。店長たちが「どうぞお入り下さい」と返事をすると、ほっとした顔で中に入ってくる。大學堂には、中をのぞき込まずにいられない不思議さと、初めてきたひとでも興味津々で立ち寄れる雰囲気がある。

最初の頃、こうしたお客さんからしきりに求められたのは、旦過市場や小倉を紹介するパンフレットであった。大學堂には街のイベントを紹介するチラシやフライヤーが置いてあるが、そんな物をごっそりと集めていくひともいた。旦過市場のパンフレットや北九州市の広報誌「雲のうえ」も瞬く間にはけていく。

こうした中でも、とくに、大學堂そのものに関する関心は強く、「それぞれの地元で同じような事業をおこなうためにはどうしたらよいか」という相談を受けることがよくあった。店長は毎日交代するので、こうした説明もそれぞれの店長の裁量に任せられている。しかし、大學堂の基本的な概要を説明するためのパンフレットがあればこうしたリクエストに応えやすくなるだろう。

そこで一一月に入り、ホームページが完成した後に、その情報をもとに大學堂のパンフレットが作られた（＊添付資料）。このパンフレットは好評で、店に置いておくといつの間にかなくなっている。自分たちで印刷をしている現状では、供給が追いつかず常に品薄状態である。来年度以降は、内容を改訂し本格的な印刷物として作成していきたいと考えている。

第四章 ◆ 新商品の開発

（木下靖子　有松由衣）

◆ 大學丼の誕生

大學堂では、今まで旦過市場に来たことのないひとを狙って、市場の面白さを自分で発見し足を運ぶきっかけになるような名物をつくろうと、企画会議を重ねてきた。そのひとつが「大學丼」である。

大學丼とは、大學堂でどんぶりに入った ご飯をお客さんに買ってもらい、市場内のお店を物色して好きなおかずを買って盛ってもらい、オリジナルどんぶりを作って楽しんでもらうというものである。

旦過市場内には、地元産の鮮魚、野菜、精肉が所狭しと並ぶ。また小倉名物の「ぬかみそだき」をはじめとして、多種多様な各店自慢の手作りのお惣菜が店先を彩っている。しかし、一般の家庭で食べることを前提とした品揃えは、旅行者にとっては敷居の高いものである。

せっかくの食材があるのに、その場で気軽に楽しむことができない。全国の市場では、食堂と提携しそこで買った食材を料理して食べられる旅行者向けのサービスをうちだしているところがあるが、

旦過市場ではまだそうした試みはなされていなかった。「新鮮なものを新鮮なままに、市場で美味しく食べていただく」を、市場に来ることの魅力として発信しよう、こうして大學丼の企画は着々と練られていった。

ここでは、大學丼の構想、準備、食市食座でのデビューの成果を報告し、これからの課題と展望を述べたい。

◆ きっかけはうなぎ

大學堂がオープンして間もない頃の七月、季節は土用の丑の日、市場に漂う鰻を焼く匂いに食欲が刺激される。その日大學堂店長をしていた進と吉岡は、せっかくだから鰻を食べようと、「武藤川魚店」に鰻の蒲焼きを買いに出かけた。焼き立ての鰻の蒲焼きを見て、「どうせなら飯に盛って食べたいなぁ」と進は思ったことを口にした。

すると隣のぬかみそだき屋の「ふじた」の店主が出て来て、「ご飯なら『くろせ』さんにもらいにいったらいいよ」という。さっそく進はどんぶりご飯を「かしわ屋くろせ」に買いに行き、それを携えて鰻の前に戻って来た。ご飯の上に鰻を乗せてもらい、タレもたっぷりかけてもらう。立派な鰻丼だが、値段は格安だった。

「かしわ屋くろせ」は精肉店だが、旦過市場で食堂もしている。鰻を買いに

行ったところで、ふつうのメニューにはない「どんぶりでご飯のみ」を売ってくれる情報を、隣のぬかみそだき屋の「ふじた」が教えてくれるなど、偶然に起こった市場的な掛け合いが、そもそもプロジェクトのきっかけになっているのが面白い。

持ち合わせの少ない大学生でも、これなら値段以上の内容とボリュームのものが食べられる。進はこのとき、これなら

鰻だけではなく、他のいろいろな食材でどんぶりを作ることができるのではないだろうかと考えた。鮮魚店には小さめのパックにおさまった刺身が売られているし、たいていのお惣菜は一個から買える。早速、大學丼企画書を作り、大北九州市場学会でプレゼンテーションをした。

それ以来、大學堂の店長たちは実験を兼ねて、自分たちの昼食に大學丼を作り始めた。実験は大成功で、旦過市場のオ

リジナル、美味しいものどんぶりを手軽に作れることがわかった。なにを選んで、どのように盛りつけるか、それぞれ作り手の個性が出るから面白い。どんぶりを片手に持って市場を歩くだけで、ひとつひとつのお店に興味が沸き、じっくりと見ることができる。空腹だったらば、なお真剣である。これを自分たちだけが楽しむのはもったいない。大學丼プロジェクトはこうして始まったのだった。

◆ どんぶりをもって歩き回る店長

大學堂の店長たちの昼食として定番となってきた大學丼を、二〇〇九年二月、小倉の飲食店による食のイベント食市食座に合わせて、一般のお客さんにも試してもらおうと計画した。

実験的にわたしたちの間で始めた大學丼は、数ヶ月経って秋になる頃には、すっかり市場の中でおなじみのものとなった。どんぶりを持って歩いている我々を見かけると、お店のひとたちは「またどんぶり持って、大學堂さん、今日は何にしたんね」と、どんぶりをのぞき込む。どんぶりになにが乗るのか、市場のお店のひとたちも楽しんで見守ってくれた。また、どんぶりを持つわたしたちの姿を見かけて怪訝な顔をする客に対して、「大学生が大學丼っちゅってね、どんぶり持っておかずを探してから作るんよ」と解説までしてくれることもしばしばだった。

このように、大學丼を始めた七月から翌年二月までの間に、市場内で大學丼の認知度は高まっていった。わたしたち大學堂の店長の他にも、大學堂の常連さんや、北九大の集中講義で旦過に来た講師、学生たちに大學丼を試してもらったが、いずれも好評であった。

また、大學丼を補足するための新しいアイディアとして「炙り屋」を大學堂の

店先でやろうという計画が一月に提案された。大學丼に乗せるおかずとして、調理されたものに限らず、生野菜や肉、魚なども選択できるように、市場で買った食材をすぐに炙って食べれるようにしてみたい、というのがそのきっかけだった。

具体的には、大學堂の店先にバーベキュー用のコンロを置き、客が食べたいものを自分で焼けるようにする。大北九州市場学会でこの炙り屋の企画を提案したとき、煙が大量に出て市場内にこもって困らないか、という意見が出た。そこで事前に、大學堂の横にある細い道に向かって扇風機を回し煙を外に出すという方法をとって実験してみることになった。大型の扇風機は鮮魚店「魚屋かじはら」から貸してもらった。扇風機を回すと、脂が多く煙が出やすい肉を焼いても、煙は内にこもらず外に排出されることがわかった。大學堂の前で何かを焼いていると、匂いや見た目に足を止めるひとが多く、デモンストレーションとして高い効果が望めた。

この炙り屋をやることにより、市場内のほとんどの店で売っている食材を、大學丼のおかずにすることが可能となったのだ。実験中の炙り屋で、「これ焼いてもいいかね」と、さっき買ったばかりという干物やしいたけを差し出す客がいた。炙り屋は市場の客に利用してもらいやすい企画ではないかという期待が膨らんだ。

◆ 食市食座デビュー

自分たちで蓄積してきた大學丼の実験データを元に、二〇〇九年二月六、七日の食市食座で一般のお客さんに大學丼を公開するべく着々と準備を進めた。大北九州市場学会の会議で、市場の店長たちと議論を重ね、具体的な価格、サービス

内容を決めていった。

二〇〇八年の一一月、食市食座のチラシに「大學堂では大學丼をやります」という広告をうった。内容はご飯とお茶のセットで一〇〇円にした。食市食座のイベントでは、三〇〇円という画一の価格で、各参加店舗が飲食の売り物を出すようになっている。大學丼は、どんぶりに盛ったご飯が売り物であり、おかずは好みで探して盛ってもらうため、最終的にご飯とおかずの合計が、三〇〇円を大幅に越えないように配慮し、一〇〇円とした。今までは大學丼を作るとき、炊いてあるご飯を「かしわ屋くろせ」や「米夢マイム」など旦過市場内の店で一杯一〇〇円で調達していたが、食市食座の大學丼デビューでは、自分たちで米を炊いて用意することにした。

大學堂でくつろいで食べてもらうために、お茶と調味料（醤油、ソースなど）、薬味（ネギ、大葉など）をサービスとして提供することに決めた。また、食市食座全体の取り組みで「マイ箸」持参が推奨されていたので、大學堂でも、マイ箸、マイどんぶりを持参する客には、きな粉餅をおまけとしてつけることにした。

こうして大學堂で出す食材は、すべて旦過市場内で調達し、店主たちの好意によって破格の値段で立派な食材を用意していただいた。米は米専門店の「米夢マイム」、お茶は「お茶の山口屋」、薬味は八百屋の「中村青果」、餅は「岩田屋餅菓子店」のものを使用した。このことは結果的に、大學丼を食べた客から「米がおいしくてよかった」、「薬味があるから揚げ物がいっぱい食べられる」、「餅が本当の餅でおいしい」といった満足を伝える感想をもらうこととなり、大學丼は、市場の専門店によってそろえられた食材が良質であることを

客に知ってもらうひとつの機会となったのである。

初めての客が大學丼に挑戦しやすいように、大學丼の盛りつけ例、作り方といったチラシを作成し配った。また、誰でも参加しやすいようにと、どんぶりを持ってお店を回る客に、我々大學堂のメンバーがガイド役をかってでることにした。わたしたちは、それまで大學丼を実験的に作ってきていたので、「どんなものをどんぶりに乗せて食べてみたいですか」と客に希望を聞き、案内することが可能であった。

二月六、七日の食市食座当日、大學堂のメンバー九名は午前九時に集合し、ご飯の炊き出しや薬味の準備などをおこなった。大學堂で炊いた米は、二日間で五升に及んだ。大學丼販売のスタートは、午前一一時である。食市食座のチラシを見て訪れたひとを皮切りに、大學堂の常連、初めて旦過市場に来た遠方からのお客さんなど、さまざまなひとが訪れ、大學丼創作に挑戦した。つくった自慢のどんぶりを大學堂で食べてもらいながら、市場のこと、食のことなど多岐にわたる話を、わたしたちは市場の客の意見として聞くことができた。

ここで、食市食座でどんぶりを作ったお客さんの一部を紹介したい。

五歳の男の子を連れた三〇代の女性は、レバーとから揚げ、コロッケ、メンチカツをお店で購入して大學堂で丼に盛り、メンチカツ丼を作った。具は、「好きだけど家ではなかなかつくらないものを選んだ」とのこと。「子どもとご飯を食べるときはゆっくり座れる場所が必要になる。大學堂は座敷まで上がれたので非常に助かった」といってくれた。ま

た、「以前は市場で惣菜を買って、それを休憩所でよく食べていたけれど、大學堂を利用していいのなら、今度からは大學堂で食べたいと思う。ふだんからご飯を売ってくれるなら、それもいいサービスになるよ」というアドバイスもいただいた。

茨城から出張で福岡に来たという三〇代の男性は、北九州のおいしいものを食べたいとのことで、一緒に市場をまわっていた皿海が勧めた北九州名物のぬかみそだきをメインとした。

歩いていた際に目に付いた「やまいち」のしらすをのせ、「ふじた」でぬかみそだきを購入した際、「北九州のおいしいものなら刺身だ」と言われ、「魚屋かじはら」で丼にするのなら、と勧められたひらすの刺身を購入した。

見た目は全て魚であるため淡白な外見だが、おかずとしてはかなり合っていた。

男性は、ぬかみそだきはご飯だけでなくお酒にも合いそうだ、と気に入ってお土産としても購入していった。大學丼の感想として、その場で食べられること、自分の食べたい量で食べられること、お店のひとと会話しながら市場の中を散策できることが面白いと話してくれた。

以前から大學堂に来てくれている七〇代の女性は、マイどんぶりを持ってこられるという、積極的な参加者であった。どんぶりにのせる具の希望を訊くと、「魚じゃない方がいい、あっさりがいい、けど好き嫌いはない」ということだったので、木下が「からあげぽけっと」の「ラーメンたまご」を紹介した。店頭で卵を見て、買いましょうと決め、ショーウィンドウに並んでいるエビの天ぷらもおいしそうね、と言って買うことにした。大學堂に帰って、木下がどんぶりのご飯を希望通り少なめによそい、エビとたまご

を盛りつけ薬味の細切りの大葉を添えると、完成したどんぶりに、「立派になったわね」と感想をもらした。「味付きたまごも天ぷらも美味しい、満足よ」と言ってくれた。

◆ 今後の計画

新商品としての大學丼の試験的な運用は、今年の事業の中で充分に進めることができた。市場の特性を生かしたこの商品は、市場の利用法をさらに魅力的なものにする、さまざまな可能性を秘めていることがわかった。来年度以降は、大學丼を旦過市場の定番、北九州市の名物として定着するように、積極的に広報を進めていこうと考えている。

観光客など遠方から旦過市場を訪れるひとにとって、大學丼は特に興味を持って参加しやすい企画であった。また市場の常連のひとであっても、どんぶりを持って市場を歩くことにより、ふだんからいく店とはちがう店を見たり、そこで買い物をしたりする機会がうまれた。生鮮食品と美味しいご飯を組み合わせた大學丼は、市場ならではの企画であり、他で簡単にまねをすることができないという点も重要である。

現在、大學堂で使用しているどんぶりは、古道具のもらいものや、安価で購入した既製品を使っているが、本格的な運営にあたっては大學丼オリジナルデザインのどんぶりをつくって使用したいと考えている。また食市食座で参加者に好評だった、マイ箸、マイどんぶり持参も推奨していきたい。あわせて大學堂でも飲食店開業の許可をとり、最小限の調理ができるように環境整備を進めていく。

すでに大學丼の大學堂ホームページでの紹介、パンフレット作りなど、大學丼の具体的な本格始動に向けて、来年度に向けた準備が進められている。また、市場のひとの協力により、大學丼の由来文の創作や、ユニークな丼など、遊び心を取り入れた大學丼のマーケティングプランが検討されている。

大學丼のやりかた。おいしい

第五章 ◆ 大學堂を活用したイベントとワークショップ

大學堂は、店舗であると同時に劇場でもある。お芝居や落語や音楽のライブ、絵画や書道のギャラリー、ワークショップや学びの場所として多角的な利用がなされてきた。この章では多岐にわたるこうしたイベントや大学の講義・研究での活用例の一部をとりあげ、それぞれの内容や目的そして効果について分析していく。

最初に大學堂でのイベントの特徴を簡単にまとめておきたい。こうしたイベントの母体は旦過市場と大學堂が共同でおこったもの、他の市場との交流を目的におこなわれたもの、音楽の演奏会や絵画展示など芸術分野におけるイベント、大学とタイアップした課外授業や講演会などさまざまである。

これらはフィールドワークの調査研究を通じてこれまで培ってきた人脈が最大限に生かされている。また旦過市場内外を問わず、多くのひとたちが大學堂を利用していくなかで、新しくうまれた人間関係もイベントの成功に結びついている。

ワークショップとして、大學堂では、大通りに面した立地を活かした各種教室が開催されている。具体的には、書道教室、草笛教室、夏休み期間中の寺子屋が挙げられる。こうした教室への参加を目的に旦過市場を訪れるお客さんや、たまたま訪れたひとも楽しめるようなものであった。

また、こうした企画は、そのものがひとつの街の風景を演出している。たとえば小・中学生の夏休み期間中に開催された寺子屋は、店長が河童に変装して勉強を教えるなど、旦過市場利用者に視覚的にも楽しんでもらうための夏らしい演出が施された。

大學堂は昨年七月にオープンして以来わずか九ヶ月間に、四二回ものイベント

を企画実施しており、それらはマスコミにも数多く取り上げられた。このようにイベントを通じて一年も満たないうちに、当事者であるわたしたちも驚くほど、北九州市内だけではなく全国的にも大學堂の注目度はあがっていた。

◆ くろねこのたんがを探せ

（吉岡　美紀）

毎月一回おこなわれる食市祭は旦過市場活性化イベントである。大學堂では市場とタイアップして、この日には独自のイベントを企画している。「くろねこのたんがを探せ」もそのひとつである。

大學堂がオープンしてまず大切だと考えたことは、大學堂という存在を市場で働いているひとに知ってもらうこと、日替わりで店長となる自分たちの顔と名前を覚えてもらうことであった。「よく見かけるひと」として認知されるために何度も旦過市場へ足を運び、大學堂を訪れた。市場内を目的もなく歩き回ることもしばしばだった。

そんな中で考えたのが「くろねこのたんがを探せ」の企画であった。「くろねこのたんが」は、旦過市場オリジナルキャラクターとして三年前にデビューした黒

猫だ。旦過市場オリジナル手ぬぐいには、市場の横を流れる神嶽側に浮かんだ小舟にくろねこのたんがが乗っている絵が描かれている。

食市祭の日、市場にくろねこのたんがが現れる。くろねこのたんがに変装した大學堂のメンバーが市場内を歩き回り、猫のふりをしたり店員のふりをしたり、ときにはお客さんのふりをしたりと自由にふるまう。お客さんがそれを見つけて、「たんが！」と名前を呼ぶと、くろねこのたんがが輪投げ券を一枚渡してくれる。それを大學堂に持っていくと無料で輪投げができ、旦過市場内の店舗こだわりの一品が景品としてもらえる。

この企画のねらいは商品交渉時にメンバーが市場を回りお店の人々と交流できること、お客さんと楽しみながら遊び感覚で交流ができること、「くろねこのたんが」というキャラクターを知ってもらうこと、旦過市場内の店舗の商品を景品として使うことで効果的に旦過市場の宣伝ができること、などであった。

イベント当日はお客さんの波がとぎれず、メンバーは休憩すらとれないといった大盛況であった。メンバーは変装したまま旦過市場内を歩き回ってパフォーマンスをし、市場の安売りや景品で目の色が変わったお客さんの列をさばき、大声で当たった賞品の宣伝をするなど、休むひまなく動き回った。

イベント自体は午前一〇時を少し回って始めたのだが、一五一品あった商品もたった四時間で品切れとなった。この企画はＮＨＫ「おはよう日本」など四つのテレビ番組に取り上げられ、当初の目的どおり全国に旦過市場を宣伝することができた。

◆ 韓国伝統郷土料理「グァメギ」の試食会

（山田　洋）

韓国浦項市職員らによる伝統郷土料理「グァメギ」の試食会が大學堂でおこなわれた。浦項市は、韓国南東部に位置し東海に面している。戦前は、漁業で栄える田舎町だったが、戦後から工業化が進

められ、一九七〇年代初頭に浦項製鉄所が誕生して以来、韓国有数の鉄鋼都市として発展してきた。

グァメギとは秋に獲れた秋刀魚を冬の間に天然干ししてつくられる漁師町浦項市の伝統郷土料理である。かつてはよくとれたニシンで作っていたが、漁獲量が減少したため現在はサンマで作られている。

浦項市を含む九竜浦邑及び近隣地域は海に囲まれており、海風が吹き込み、冬は気温が五～一〇度ほどであるためグァメギ生産に適している。最高品質のグァメギが生産され、韓国のグァメギ生産の八〇パーセントを占めている。

冬の冷たい夜風による冷凍と昼間の解凍を繰り返し生干しにすることで、余分な脂がおち魚の身は引き締まり、歯ごたえある食感になる。干物のような濃い味があるが、野菜に巻いて食べると意外にさっぱりとしている。

ふつうはレタス巻きのようにして、コチュジャン、ニンニク、酢などを混ぜた調味料をつけ、白菜、海苔を巻いて食べる。韓国では手軽で簡単に作られる酒のつまみとして食されている。日本ではまだ販売されておらず、個人輸入でしか手に入らない。

浦項市が北九州市に商店街での試食会の開催を問い合わせた際、大學堂が紹介され、この企画が実現した。

試食会当日、年末に向かい人通りの多くなっている旦過の通りで、チマチョゴリに身を包んだ留学生らが買い物客に試食を勧めた。

大學堂では表にグァメギ宣伝用の幕を張り、すぐに試食できるように店の出入り口付近にテーブルを並べた。その場で唐辛子みそをつけたグァメギと青ネギを海苔で巻いたものに爪楊枝を刺し、試食の準備をした。市の職員が「おいしいですよ。どうぞ、グァメギを食べてみてください」と試食を勧めるとともにグァメギの由来や栄養学的価値を説明した。

グァメギを試食したお客さんは「生干しならではの食感と旨みが辛さの効いた唐辛子みそとよく合う」と話していた。

試食会は朝一一時ごろから昼二時半で

ろまでおこなわれ、大學堂一帯が活気ある雰囲気に包まれた。日本の市場の中に小さな韓国が誕生し、日常とはちがった異文化を楽しめる一日となった。

大學堂では書道教室、草笛教室、河童による寺子屋など各種のワークショップを開催している。続いてはそうしたワークショップについて紹介する。

◆ 創作書道会「楽墨会」

黒田陽子

創作書道会を始めるまでは、「河童とお嬢さん」というテーマで旧過市場を練り歩くなど、同じ大學堂メンバーの山城と小芝居をうっていた。しかし、私自身演劇は素人な上、恥ずかしさもあり、なかなかおもしろい演出を思いつくことができなかった。

そこで、芝居をするのは山城と店長を組む日だけにして、わたしらしさを生かしたなにかもっと他の企画をしたいと考えていた。たとえば、お茶の盆点てやワークショップなど、大學堂という家の中でできることをしたい。わたしが学生時代から嗜んでいた点茶や書道ならこの家の中でもできるかもしれない。

そんな折、「書道をしてみたい」というメンバーの吉岡と一緒に店長をする機会を得て、「楽墨会」を結成した。結成

といっても、わたし一人が静かに名乗っているだけなのだが、教室にしてしまうと「教える」という要素が強くなってしまうので、「墨筆を楽しむひとの集まり」という意味を込めている。

楽墨会は二〇〇八年九月末に始動した。月二回程度、こちらで書道具を提供して、半紙と墨代（三〇〇円）を参加者に負担してもらう。時間は参加者とわたしの裁量でその都度決める。つまり、習

字教室ではなく、体験型のワークショップのような形にした。そのほうが、書道家ではないわたしにとって大きな負担となることもなく、また参加するひとたちも気軽に楽しんでいただけるのではないかと考えた。とはいえ、創作書道もただ字を書けばいいというわけではなく、筆の運び方、墨の濃淡、余白（白と黒の織りなす美意識）などを知って習得したほうがいい。そのため、体験して面白いと思ってくれた方には講座を開設することにした。

基本的に創作書道の講師はわたし一人しかいない。一番弟子の吉岡、そしてたまに、高校時代の友人の森山さんにお手伝いを頼んだりしていたが、それでも対応できないほど楽墨会にはお客さんがやって来た。

実際に筆を執ってみるひと、筆には触らないが一時間も皆が書いている姿をのぞいているひと、珍しそうに写真を撮るひとなどで大學堂は溢れた。わたしは創作書道について簡単な講義をしながら、運筆や墨色について口を出し、新たな見学者に話しかけるという多忙な時間を過ごした。

そのような中ではあるが、三人の女性が楽墨会で定期的に活動してくれることになった。

裕子さんは旦過市場で天ぷら屋さんを営んでおり、楽墨会の時はご主人に店を見てもらったり、少し店を抜け出したりして参加している。

幸子さんは旦過市場の近所に住んでおり、楽墨会で創作する前に魚を注文し、活動後に魚を受け取って帰っている。ほぼ毎日、旦過市場に来ている常連さんで

ある。

千春さんは旦過市場にはバスを二本乗り継いで来ている。旦過市場には毎日ではないが、もともとよく来ていた。楽墨会に参加することになって、「じゃあ、もっと旦過に来なくちゃ」と喜んでくれた。また、旦過によく来ることについては、「旦過のファンだから！」という。

三人ともこの活動を毎月楽しみにしてくれており、裕子さんと幸子さんは、「大學堂でいろいろやってくれるから楽しい。にぎやかになった。明るくなった、本当にありがとう」と言ってくれた。幸子さんはわたしたちとこたつに入ってご飯を食べたりして、書道だけでなく大學堂という空間も一緒に楽しんでいる。

このように大學堂を利用して、三人ともお互いに品評しながら刺激を受け、面白い作品を生み出している。わたしは皆に刺激を受けて内心焦ってもいるが、墨を楽しむ仲間ができて大変嬉しい。

大學堂から墨の香りが漂ってくると、「何だろう?」とひとが集まってきて、習字教室ではないとわかっても「懐かしい、何十年ぶりかな」と言って筆を持ってみるひとが多い。

くじら屋のご主人曰く、「昔は習い事といえば書道しかなく、楽しみはこれしかなかった」というように、旦過市場のお店のひとや主客となっている年代のひとたちには、子ども時代に書道を習っていたひとが多く、書道は字を習うと同時に唯一の娯楽でもあったようだ。

しかし、ある程度美しい字を書けるようになれば書道を辞めてしまうひとも多いようだった。

現在はパソコンの普及で活字離れも進み、準備や片づけに時間を要する書道を楽しむひとは少なくなってきたように思う。また、白と黒を基調とする書道は、彩りの豊かな世界の中では地味に映るのかもしれない。

ただ字を知り、美しく書くことを習うだけが書道ではない。創作書道は美しい字を習いたいと思っているひとには向かないかもしれないが、書の歴史を紐解いてみると多くの書体が存在しており、それぞれに印象がちがって面白い。

創作書道ではさまざまな筆を用いて身体全体を使って書く。紙も筆も墨も表現したいものによって自由に変えてみる。そのように試行錯誤しながらも、一枚の紙に対して一発勝負で書き上げなければならず、集中力を要する芸術である。その書き上げる姿は、一つのパフォーマンスでもあると思う。音楽も歓声もないが、試行錯誤しながら表現しようとする吉岡の姿は美しい。わたしはもともと書の世界の面白さや奥の深さを知ってもらい、仲間と一緒に楽しみたいという思いがあった。それが旦過市場でこのような形で実現するというのもまた不思議な縁だと思う。

さて、大學堂がある旦過市場は個性豊かな書体に溢れている。一軒一軒の店の主がちがうのだから、売り出し方もさまざまで興味深い。「ちりんちりん豆」のうねったような書体も面白く、くじら屋の看板は何だか可愛らしい。看板や商品の売り文句などの文字を見比べながら、市場を散策してみるのも面白い。

もし名物のぬかみそだきなどの食材の香りに混じって、墨の香りがしたら大學堂で久しぶりに筆を握ってみて欲しい。

これから楽墨会の活動をどうしていくか。今では楽墨会は「大人の書道教室」として少し知られているかもしれない。

以前、大學堂で手作り凧のワークショップをしていたメンバーの大久保が、二月一四日のバレンタインデーに手作り凧に毛筆でメッセージを書いて飛ばすという企画を考えていた。「もう、チョコレートで思いを伝えるのは古い」という発想の大変ユニークで面白い企画だ。今年はそのコラボを実現できなかったが、メッセージ凧は楽墨会のメンバーも楽しみにしているので来年こそはと思っている。

◆ さわやかな草笛教室

（山田　洋・進　麻菜美）

矢野郁子さんは「北九州草笛吹こう会」の主催者であり、旦過市場近くで毎週金曜日に教室を開き、生徒さんに草笛を教えている先生である。自身の教室後に旦過市場を訪れているという矢野さんは、大學堂がオープンしてまだ間もない頃に持っていた葉っぱで草笛の技を披露してくれた。わたしたちは一枚の葉っぱから奏でられる複雑なメロディと音量に圧倒され、ぜひ大學堂で演奏会をしてほしいと教室の主宰をお願いしたのだった。

草笛教室は八月二六日に初めて開かれた。必要な物は矢野さんが用意してくれた葉っぱのみ。大きな枝を水の張ったタライにつけ、そこから新鮮な葉っぱを一枚ちぎる。初回のその日は夏休みだったこともあり、大學堂には子どもたちの姿も見られた。その後、九月に第二回目をおこない、一〇月からは第二金曜日を草笛の日として毎月定期的に草笛の演奏会と講習会をおこなっている。

先生は矢野さんひとりである。自身の教室では毎回決まった生徒さんをもっているが、大學堂でおこなう場合、生徒はその日の大學堂店長とふらりと訪れる旦過市場のお客さんである。

矢野さんは初めてのひとにも親切で丁寧な指導をしてくれる。特に大學堂メン

バーの山城は矢野さんが初めてきた頃からずっと生徒として教室に参加し、練習している。他にも、大學堂メンバーの山田は草笛を初めて手にしたときからかなり上手で、その日のうちに曲が吹けるようになったという才能の持ち主だ。矢野さん自身も、若い学生や子どもたちに草笛が広まるのがうれしいようだ。

教室がある日は旦過に草笛の音が鳴り響く。音につられて大學堂に足を入れるひとは少なくない。「昔はよく吹いていたのだけど」と片手で唇に葉をあてて吹くひともいる。家庭にテレビゲームやパソコンがなかった時代、子どもはみな外に出て自然の中で遊び、学んでいた。おじいちゃんや近所のおにいさん、おねえさんたちに吹き方を習い、ピーっと音が出るのを遊びとして楽しんでいたのだという。

矢野さんはその子どもの遊びである草笛で曲を演奏し、音楽の域にまで高めたひとである。矢野さんはどの葉っぱも笛にすることができ、「歌をうたうように吹くのよ」と言いながら「となりのトトロ」などの曲をすぐに演奏してみせる。どこにでもある葉っぱ一枚が楽器になるというのは、現代に生きるわたしたちにとって衝撃であり、とてもおもしろい。なにも道具がなくてもできるというところがすごい。

矢野さんは草笛コンサートをすることが今の目標だという。いきいきと語るその目には、大學堂で練習したひとが楽しく発表するコンサートが浮かんでいる。また、草笛を始めることで植物への関心を高め、自然で遊ぶことの楽しさやすばらしさを知ってもらうきっかけにしたいとも話している。

◆ 夏の寺子屋

（山城　若菜）

八月二三日、わたしが初店長の日である。大學堂の内装工事やオープニングイベントに関わったことはあるが、自分で一日をプロデュースするのは初めてであった。大學堂の昭和レトロの雰囲気を活かし、なおかつこの時期にできるのは何だろうか。

ここで思いついたのが寺子屋だった。

旦過市場で働く父母をもつ子どもたちは、長期休みのあいだ家や店にいることが多い。しかし、親も四六時中子どもを見ているわけにもいかず、また子どもたちも宿題などを抱えている。大學堂には営利を優先しない大人が店長となることが多い。大學堂なら塾ではなく学童保育でもなく、様々な年齢のひとがゆるやかにつながる場所となるのではないかと考えた。また、対象を旦過市場内で夏休みを過ごす子どもたちにしたかったので、あえてチラシは作らず口伝えで宣伝した。

寺子屋では八月二二日から二五と二七日の一〇時から一七時まで、大學堂に来た子どもが持ってきたなど宿題をみた。その日の店長によって内容はちがっている。

二二日の店長：黒田・山城
「河童と手紙教室」
二五日の店長：原口・山城
「昭和の勉強部屋」
二六日の店長：井上・山城
「草笛教室」
二七日の店長：皿海・赤松
「夏休みの工作教室と合馬特産品販売」

講師は店長だけではなく、その場に居合わせたメンバーや大學堂を訪れたお客さんである。教える・教わるという決まりきった関係ではなく、居合わせた場でのゆるやかな学びあいを目的とした。出入りは自由で、子どもたちは来たいときに来て、帰りたいときに帰っていく。

キュウリを囓る河童の教師も現れた。若松出身の火野葦平が河童を好み、旦過市場の西側には神嶽川が流れている。北

九州の夏には河童がよく似合う。子どもたちは大学生や先生どころか、人間ですらない河童にものを習うのである。

さて、そんな寺子屋を利用した子どもを紹介しよう。Rちゃんは寺子屋最初の日に母親と一緒に来店した。その時のわたしの格好が河童だったのにも関わらず平静であり、社会の宿題を取り出して勉強をはじめた。のちに聞くと「実はちょっと恥ずかしかった」という。勉強は嫌いではないらしく、周りがおしゃべりをしていても黙々と課題を進めることができる。年上に対しては敬語を使い、メンバーが社会の宿題をわからなかったときに「これは難しいですよね」とフォローを入れる場面もあった。

K君は寺子屋の二日目より来店した。母親が「引っ込み思案であまりひとに慣れにくいですが」といっていたものの、寺子屋の間は勉強よりもその日の店長の原口とわたしに話しかけていることの方が多かった。三日目の寺子屋で、K君の父母が働く店に誘いに行くと「昨日のおにいちゃんじゃない」と不服そうであったが、午後に開催した草笛教室が終わるころにはその日の店長の井上にすっかりなついていた。

昭和初期のイメージで勉強机はダンボールを使用し、絵本・岩波文庫・外国民話など河童関連の本を一〇冊そろえて自由に読めるようにした。そのなかから絵本を選び、祖母の旦過市場での買い物に付き合って来ていた子どもに読み聞かせをした。子供の祖母は「市場

に行ってこうやっていろんな年齢のひとね、ちょっと話したり本を読んでもらえたりするのってなかなかないからね。夏休みにこの企画はいいわね」と話してくれた。いろんな年齢のひとだけではない、妖怪もいるのだ。

教育環境の整備というお題目の下、小学校にも空調設備が入り、勉強のみに目的が特化した学校や塾などの閉じられた空間に子どもたちが囲い込まれている。

教育の現場の教える・教わるという関係の中では、大人たちは一方的に知識を与える立場でしかその場にいられない。「プロ」の仕事は細分化し、子どものこころを受け止めるためのカウンセラーや地域ボランティアの監視が、この限られた空間をさらに狭いものにしていく。

しかし厳しい残暑が残る大學堂での勉強は、そんな快適さはまるでなく、次から次へと見知らぬ客やメンバーが介入する状態は気が散り易く、お世辞にも理想的な場所とはいいがたい環境でおこなわれた。

さらに大人もふくめそれぞれが目的や年齢層を限定されずに学び、先生や年上という枠もなく、大人と子どもたちがその場で自分から対等な関係を築き上げていかなくてはならない。そんな寺子屋である。

最終的に教育が目指すもの、それがひとの育成であるならば、効率や結果といった目に見えるものだけを追求する今の教育では足りないところがたくさんあるように思う。小さな試みではあるが、大學堂の寺子屋は、大人と子どもが一緒になって人間として学ぶことの楽しさを知るそんな場所にしたかった。

教室にはそれまで交流がなかった店からも差し入れが入り、お互いの仕事や活動を子どもを通じて知ることとなった。

そして学校の長期休みにまたお願いしたいという、うれしい申し出もあった。わたしにとっても、教育を考えるとても良い機会になった。河童の寺子屋は、今年も夏の訪れとともに旦過市場に出現するだろう。

◆ 市場を大学に、大学を市場に

（竹川　大介）

ひところ「象牙の塔」という言葉がはやった。大学でおこなわれる学問は、一般の市民のおよびもつかない世界のできごととして、その道の専門家の中だけで共有され秘蔵される。そうした知識の独占に対する批判と、内輪にしか通用しない研究への皮肉としてこの「象牙の塔」という言葉は使われていた。

やがて大学への進学率があがり、大学がカジュアルな場所になるにしたがってこうした言葉はあまり使われなくなったが、学問は、相変わらず難解さにこそ権威があると信じているひとを時々見かける。こういうのを、難しい言葉でペダンチック（衒学的）というが、いうまでもなくそんな言葉を使うこと自体がまさに衒学的なのである。

たしかに最先端の斬新な研究は難解で、一部のひとだけがその端緒を開いていくこともあるだろう。しかし、むしろ、時代を超えた長い目で見れば、どんな真実も最後は多くの人々に理解され共有される。私自身は真実は誰にでも通じる言葉で語ることができてこそ真実だといつも考えている。

さて、旦過のお店に「大學堂」という名をつけたのは、まさしくこの場所が大学であってほしいという思いを込めてのことである。

街の歴史や社会関係、経済や行政の生きた教材として、大學堂にやってくる人々ほどふさわしい者はいない。学生たちは大學堂にいるだけで、複雑な人間関係を理解するスキルを身につけていく。机上の学問では学ぶことができない貴重なものを大学からモノレールでわずか一〇分のこの場所で学ぶことができる。

わたしたち人類学者は遠くの国の異文化を訪ねては、フィールドワークと称して暮らしに身を置き、語り部の言葉に耳を傾ける。大學堂の店長として市場に身を置き、一番驚喜したのは、わざわざわたしの方から訪ねて行かなくても、街の語り部たちが吸い寄せられるように向こうから大學堂に集まってくるということだ。

彼らはまた、私自身の経験や研究について強い興味を示してくれる。知らず知らずのうちに、興味を持つひとたちが集まってひとつのサロンができあがる。時には酔っぱらいのお客さんを相手に大学

では考えられないほどの激しい議論も起きるが、それをふくめて学問なのだと思う。

さて、そんなわけで、大學堂でゼミをするときはいつもとちがう緊張がある。大學堂がオープンした三日後の七月一〇日にはさっそく最初のゼミが開かれた。のぞき見、野次馬、大歓迎である。

九月五日には動物行動学者、薮田慎司氏による北九州市立大学の集中講義「フィールドワーク論」の学外実習の場として、はじめて受講生による大學丼づくりをおこなった。市場の店主とのやりとりや会話をフィールドワークの導入として学んでもらった。

二月三日と二月四日には菊陵中学校が旦過市場で体験学習をおこなった。大學堂では、生徒たちが節分にちなみ、鬼に変装して綿菓子を販売した。

もちろん学ぶだけではなく、大學堂を通じてわたしたちが持っている知識を必要なひとに伝えていくという試みも重要である。

一二月一日には法学部メンバーによる法律相談会が開かれた。三月四日は年末に市場で修士論文のための調査をおこなった九州工業大学工学部建設社会工学科景観工学まちづくり研究室の栗山による論文発表会をおこなった。簡単な内容ではなかったが、たまたま通りがかって聴講した女性は、「非常に面白かった。ぜひこういう機会があるときは知らせてほしい」と喜んでくれたのが印象的であった。身近でこうした専門的な話をきく機会は、なかなかないのかもしれない。

三月一三日には「大學堂おもひでぽろぽろ」というタイトルで大學堂の一年間の活動に関する報告会をおこなった。北九州市立大学の四・二〇五を借り学内向けの報告会であった。

三月一六日には同じ内容で、大學堂にて市場向けの報告会を開いた。

三月二〇日は、JICAの助成金で今年の一二月にバヌアツ共和国に研修旅行をした平尾台四季の丘小学校の子どもたちによる報告会が開かれている。

何でも売っている市場なのだから、もちろん知識も売られていて良いのである。たとえば今ヨーロッパなどで静かにはやりはじめている「人間図書館」のようなものを大學堂でも試みてみたいと考えている。他のひとにはない特別な体験を持つ人々をリストに登録し、そのひとの話を聞きたいひとが、お金を払ってそのひとの時間を買うのである。現代の語り部が住むところとして、市場の最深部ほどふさわしい場所はないだろう。

第六章 ◆ 全国への展開

（進　麻菜美）

前章で述べたとおり七月七日のオープン以来、大學堂はさまざまなかたちで取り上げられ、北九州市内での注目度は高まっている。今後はこれをどう全国的な展開に結びつけるのかが課題となる。

少しずつではあるが、他地域で芸術や文化、あるいは街づくりの観点から同じような活動をしている人々と、大學堂との交流が進んでいる。

◆ 視察と交流

イベント日程と訪問日程の表にあるように、七月二八日には京都市の宇治商店街で商学連携のプロジェクトを進めている京都文教大の橋本和也氏、大牟田で炭坑跡地の産業遺産としての活用を進めている「NPO法人大牟田・荒尾　炭鉱のまちファンクラブ」の永吉守氏が大學堂を訪れた。

八月八日には以前から交流を持っていたみやま市の産業振興を進めるメンバーが市役所職員とともに、みやま市特産品の販売と、大蛇山の展示会をおこなった。

八月一九日から八月二三日、および九月一七日から九月二一日には、沖縄市の商店街であるコザ銀天街で芸術活動をしている「スタジオ解放区」から、自転車でリヤカーをひき全国を行脚している途中の平良一樹氏が訪問した。大學堂をいたく気に入った平良氏は予定を変更ししばらく小倉に滞在してくれた。

一一月二六日には日経新聞の北九州市立大学の地域貢献日本一の記事を読んだ千葉県我孫子市議会議員、海津にいな氏が、北九大と旦過市場の商学連携の様子を視察に訪問。

二月六日には武蔵野市議会議員の川名ゆうじ氏、きくち太郎氏がBQグルメのメンバーと共に大學堂のコミュニティースペースという点に注目し、視察をおこなった。

二月一六日には那覇市公設市場の視察団が大學堂観光プログラムを体験した。また三月四日には東京の築地市場でセリ人をしている鈴木允氏が大學堂と旦過市場の視察をおこなった。

大學堂のメンバーも、釧路の市場をはじめ、仙台、武蔵野、大牟田、沖縄栄町など他地域の市場の様子を視察し、それぞれの地域で活動しているメンバーとの意見交換の場を持っている。こうした全国規模の活動によって、旦過市場の知名度の向上と、市場の連携を深めていくことが期待される。来年以降は共同でイベ

■イベント記録

日付	イベント名	イベント内容
6月23日	丸北との店舗利用打ち合わせ	
6月24日～7月6日	大學堂開設準備作業	作業棟梁の指導のもと作業　棟梁：近藤さん（6.23～6.26）明歩さん（6.23～7.5）バットさん（6.25～6.27）
7月7日	大學堂オープニングセレモニ	かまぼこカット、ちんどん屋、三線コンサート、バンド演奏、ジャズ演奏、手作りブラウニーの振る舞い
7月8日	大學芋販売	様々な味の大學芋の販売
7月10日	人類学ゼミ	和装で人類学ゼミを行なう
8月1日	わっしょい百万食市祭	焼きトウモロコシの販売、わなげで卵、さいころ運試しイベントの開催
8月8日	みやま市物産店	みやま市特産品の販売、大蛇山の展示会
8月18日	竹笛ワークショップ	竹笛製作と販売
8月18日	祇園祭り	白い象を模した神輿を担いでの参加
8/19～8/22	リヤカーマンがやってくる	ぬか漬けや農や食について修行しながら、自転車とリヤカーで全国八の字一周中の平良一樹氏が訪問
8月22日	河童の旦平	河童と和服の飼い主に変装した2名が市場内でパフォーマンス、河童による寺子屋、本の読み聞かせを行なう
8月22日～8月27日	寺子屋	夏休み中の子どもを対象にした寺子屋を行なう
8月23日	沖縄デー	氷ぜんざいの試食、沖縄トークショー、縁側的雰囲気の演出
8月27日	森林組合物産店	合馬竹グッズ、カブトムシの販売
9月4日	クジの日	クジの日にちなみ手作りクジの販売
9月5日	北九大集中講義	北九大集中講義フィールドワーク論、薮田慎司氏による学外実習。受講生による大學丼の参加
9月6日～9月28日	街じゅうアート	牧野伊佐夫氏原画の展示会
9月9日	映画上映会	北九大映画サークルによる映画上映会の開催
9月17日～9月21日	再びリヤカーマンがやってくる	平良一樹氏再訪問
9月21日	珍計画	ちんどん屋としての魚町銀天街主催の一店逸品イベントの宣伝
9月21日	フルート教室、ガリ版教室	大學堂メンバーによるフルート演奏、孔版印刷による名刺づくり
10月1日	食市祭	「くろねこのたんがを探せ」の開催、竿屋青竹氏による落語興行
10月5日	ノーマイカーデー	岡部和慶氏によるガリ版のジオラマ展示会と横山淑子氏によるエコバック製作講習会
10月5日～10月13日	ガリ版ジオラマ展示	岡部和慶氏によるガリ版のジオラマ展示会
10月7日	堤琴の夜	谷本仰氏によるバイオリン演奏会
10月18日	大學堂落語会	山椒亭小粒氏による落語興行
10月23日～10月27日	絵手紙展示	岩田千明氏による絵手紙の展示
10月28日～11月3日	冬改装	冬支度のための店舗改装
11月3日	食市祭	「くろねこのたんがを探せ」の開催、竿屋青竹氏による落語興行
12月1日	法律相談室	法学部メンバーによる法律相談会
12月11日～12月19日	北九州モノレール切符販売	北九州モノレールによる昼割切符の販売
12月14日	歌劇「ジュリアス・シーザー」	大學堂メンバーによる歌劇の脚本と公演
12月19日	グァメギ試食会	韓国浦項市の名産「グァメギ」の試食会と宣伝
12月20日	ミニみやま市物産店	みやま市物産品の販売
12月27日	クラシックコンサート	「楓雅」によるクラシックコンサート
2月3日, 2月4日	菊陵中職場体験学習	体験学習生による鬼に変装しての綿菓子販売
2月6日, 2月7日	食市食座	「大學丼」、「炙り屋じゅうじゅう」の開催、きなこもち、しょうが湯の販売
3月2日	食市祭	「楓雅」によるクラシックコンサート、甘酒の振る舞い
3月4日	修士論文発表会	九州工業大学工学部建設社会工学科景観工学まちづくり研究室修士2年、栗山喬氏による修士論文の発表会
3月13日	大學堂おもひでぽろぽろ	大學堂の一年間の活動に関する北九州市立大学４－２０５での報告会
3月14日	太鼓演奏会	ＧＯＮＺＯ－夢ｓによる太鼓演奏会
3月16日	大學堂おもひでぽろぽろ	大學堂の一年間の活動に関する市場での報告会
3月20日	バヌアツ研修旅行報告会	平尾台四季の丘小学校のこどもたちによるバヌアツ研修旅行の報告会

■視察の記録

視察日	視察団体	内容
7月28日	京都文教大　橋本和也氏、NPO 永吉氏	大學堂の視察
11月26日	千葉我孫子市議会議員　海津にいな氏	大學堂運営、北九大と旦過市場の商学連携の様子を視察
2月16日	那覇市公設市場	大學堂観光プログラムへの参加
3月4日	築地市場　鈴木氏	大學堂、旦過市場の視察

■取材の記録

取材日	放映日	番組名・団体名	内容
6月29日	6月29日	RKBテレビ取材	建てこみの様子
7月4日	7月4日（夕刊）	毎日新聞	大學堂内の写真撮影
7月4日	7月11日(朝)	朝日新聞社会面「青鉛筆」	
7月4日	7月4日（夕刊）、7月8日(朝)	西日本新聞	
7月7日		NHKニュース	
7月12日	7月13日	FM KITA-Q	
7月31日		県民共済フリーペーパー取材	
8月3日	8月3日	FM KITA-Q	
9月1日		ひろば北九州	大學堂コラム執筆
8月26日		朝日新聞	大學堂日替わり店長システム、草笛講習会の取材
9月5日		J-com北九州	市場活性化としての大學丼の取材
9月9日	9月10日	めんたいワイド	大學堂運営風景の取材
9月3週～10月1日	10月1日「おはよう日本」内「西日本の旅」、10月16日「ゆうどきネットワーク」内「列島　津々うらうら」、10月28日「ぐるっと8県　九州沖縄」内「北九州発!ふれあい町あるき」、10月29日「こんばんは北九州」内「ふれあい町あるき」再放送	NHK	「くろねこのたんがを探せ」の取材
10月23日		求人情報誌an	旦過市場及び大學堂の紹介
10月27日	10月27日	クロスFM	大學堂について
12月2日		読売新聞　日曜版	大學堂の撮影、商学連携についての取材
12月9日		韓国TV番組	旦過市場及び大學堂の取材
2月15日	3月2日	朝日新聞	大學堂観光プログラムの紹介
3月2日		九州の食卓	旦過市場及び大學堂の紹介

ントを企画するなど、さらに積極的な活動を展開する予定である。

◆ メディアによる情報発信

市場と地域の大学が結びついた商学連携プロジェクトとして大學堂はオープンした。その取り組みはオープン前から話題を呼び、新聞に大きく取り上げられてきた【右表　取材の記録】。

大學堂のメンバーもこうした多くのひとたちの期待に応え、平日一〇時から一七時までと開店時間を当初の予定より長くし、前章で述べたようにアート、音楽、落語に至るまで、数多くのイベントを積極的に企画し、実行してきた。さらにそれらの活動は街の元気な話題として新聞、テレビ、ラジオ、雑誌等、多くのメディアに取り上げられ、良い意味での相乗効果が起きている。また結果としてそうした情報は旦過市場や北九州市立大学の知名度の向上にも貢献している。

インターネットも積極的に利用し、大學堂にはスカイプを利用したインターネット電話が取りつけられている。また活動を全国に発信するため、一〇月にはメンバーの竹川によって大學堂のホームページが作成された。ホームページ上には、大學堂でおこなったイベントや、大學堂を利用した観光プログラムや教育プログラムの紹介などが盛り込まれている。大學堂のホームページは旦過市場のページとタイアップし、市場の情報を全国に発信している。今年度の活動実績もふまえ、今後はさらに情報の双方向性を意識した内容へと充実させていく予定である。

◆ 利用客の新地開拓

旦過市場の利用客は大半が高齢者であり、今後の市場の持続的発展のために若いひとの来店を増やすという課題を抱えている。大學堂ができたことによって、北九州市立大学の学生に向けて活動報告会をおこない、また大學堂を講義に利用するなど学内での活動を広めることができた。

また北九州商工会議所の仲立ちによって「経営者と学生との意見交換会」が開催され、九州工業大学や九州国際大学などの近隣の大学との交流もうまれた。

大學堂ではアートや音楽のイベントを数多くおこなったことで、二〇代から三〇代の新しい利用客層が、大學堂をイベントスペースやギャラリーのような存在として捉え、定期的に足を運びはじめている。

◆ 海外からの利用客

旦過市場の人気は国内にとどまらず、韓国や台湾のテレビ番組からの取材も増

えている。大陸からもっとも近い街として、北九州は福岡や下関と並びアジアとの玄関口になっている。

大學堂も韓国からの取材を受け、また台湾からの観光客を受け入れるなど、懐かしい日本の風景がアジアの人々の共感をよび注目されていることがうかがえる。

近年、海外からの観光客は旦過市場にも増えており、日本語が話せない日系ペルー人の女性が大學堂に訪れた際には、大學堂のメンバーが英語でお勧めの食材などを紹介した。八幡に住む彼女は今も常連客として、頻繁に足を運んでくれている。大學堂メンバーには英語や中国語を学ぶ学生も多く、日本語がわからないお客さんに対するガイドなど、市場が海外からのお客さんを受け入れるために柔軟に対応している。

◆ 大學堂を動かすもの

さて、大學堂の対外的な取り組みとしてさまざまな実践例をあげたが、最後に、ひとつだけつけくわえてこの章を終えたい。旦過市場が魅力的な場所であり、大學堂がわたしたちにとって大好きな場所であること、この動機がなければどんな交流も広報活動も意味をなさない。

お金や手間をかけて、白いものを黒いと言いくるめるような商業的な宣伝は、大學堂にはなじまない。どんなにすばらしい活動も、そうしたコマーシャリズムにのってしまった瞬間に不純な動機がうまれてくる。もちろん、わたしたちはそんなお金もなければ、影響力も持ち合わせてはいないので心配するにはあたらないのだけれど。

蛇足のようになってしまうが、わたしたちが好きなこの場所を、多くのひとたちに知ってもらいたい、この場所が好きなひとたちをもっと増やし、この場所を大切にしたい。そうした気持ちが大學堂の活動を支えているのだということを、記しておきたいと思う。

朝日新聞　2008／7／11

青鉛筆

▽北九州市小倉北区の旦過市場の一角に、北九州市立大の学生たちが空き店舗を改装した劇場「大學堂」を開いた＝写真。演奏会や展覧会で市場を盛り上げる。

▽土間と6畳の和室があり、和室が舞台。ふだんは休憩所として使ってもらう。市場らしく、7日の開場式では縁起い紅白のかまぼこを切る「テープカット」で祝った。

▽市民の台所としてにぎわう市場だが、若者は多くない。大学生代表は「若い人を集めたい」。学生主演の「活性化劇」は大入りとなるか。市場の人たちも注目している。

西日本新聞 2008年7月4日

7日のオープンに向けて準備が進む「大學堂」＝3日午後、北九州市小倉北区の日過市場で

旦過市場に交流拠点

北九州市立大の学生たち

7日オープン

雑貨販売、イベント開催…

活性化目指す

市場の一角にあるかき氷屋（約一十二平方メートル）を借り、学生たちが改装、「百年近い歴史の雰囲気に合わせ「昭和のレトロな感じ」をテーマに、コンクリートの床に敷物をきり、縁台を置いたり、懐かしい雰囲気を演出した。

店舗の元地をさがし、「旦過横丁」として生鮮食料品を中心に約三十軒ある商店街の活性化を目的に、「商店街を盛り上げる」ことを目的に、「文化拠点」としても多くのイベントが開催を計画。

学生を進めるNPO法人四年目の三橋立樹さん（二）は「市場は活気の雰囲気の対面販売のやりとりが魅力。人とかかわりあえる学生の場にしたい」と語る。

旦過商店街は昭和の各地の商店街と共通。「学生は市場の活性化の対面販売のやりとりが魅力。人とかかわりあえる学生の場にしたい」と語る。

旦過商店街は昭和の各地の商店街と共通。「学生は市場の活性化の対面販売のやりとりが魅力。人とかかわりあえる学生の場にしたい」と語る。

商店街サークル化にも位置を呼びかけ、「文化拠点」としても多くのイベントが開催を計画。

学生を進めるNPO法人四年目の三橋立樹さん（二）は「市場は活気の雰囲気の対面販売のやりとりが魅力。人とかかわりあえる学生の場にしたい」と語る。

旦過商店街は昭和の各地の商店街と共通。「学生は市場の活性化の対面販売のやりとりが魅力。人とかかわりあえる学生の場にしたい」と語る。

商店街サークル化にも位置を呼びかけ、「文化拠点」としても多くのイベントが開催を計画。

学生を進めるNPO法人四年目の三橋立樹さん（二）は「市場は活気の雰囲気の対面販売のやりとりが魅力。人とかかわりあえる学生の場にしたい」と語る。

読売新聞 2008年7月5日

旦過市場の魅力 学生発信

研究、イベント拠点 7日開設

空き店舗に「大學堂」

雑貨販売、文化拠点にも

毎日新聞 2008年7月4日 1 4版 2008年（平成20年）7月4日（金）

7日の開店に向けて準備に追われる北九州市立大の学生たち＝北九州市小倉北区の日過市場で

北九大と商店主が連携

旦過市場に学生の店

Evening フォーカス

北九州市民の台所、旦過市場（小倉北区）の上に進んだ今月、北九州市立大の学生や教授らが旦過市場が活性化するNPOオープンするための「大學堂」。商店街の新しい文化拠点としても活用し、議論の場ともなる。市場と大学の強みを組み合わせ、活性化を目指す。【佐藤敏一、写真も】

100年近い歴史を持つとされる旦過市場は古い木造建物が多く、駅から約1・3キロ。市の調査では、市内出入りの1日の通行量は、98年の3004人から今年は2352人と半減しているという。

駅のスポットとしても再注目されているが、若者は大型商店街に流れ、店が登録の約120店で、市の買い物だけでなく、レトロな雰囲気が残る。

北九大と旦過市場は今年、「これまでも連携を進めてきた。学生や教授らの調査を通じ、市場の活性化に役立ちたい」と期待している。

同年に旦過市場と「コンサルタント契約」を締結、「研究会」はさらに市場有志と「大北九州市場学会」を設立して、市場の再生に貢献する場としてきた。

これらの活動から、学生の店の発想が浮び出した。東京都出代表の竹川大介・文学部教授（人類学）は「人類学の目から見ても面白い発想。学生にとって市場の中に自分たちの店が持てるのは刺激的」と話す。

空き店舗を活用、国内外でフィールドワークをしし、廃棄に使の工夫品の販売を、学生が市場のPRを図り上げた。

「生きて」と意気ごむ。

商店街たちが学生たちの挑戦に期待する面も大きい。「小倉旦過」代表の黒崎義和さん（会）は「にぎわいづくりのためにぜひ市場へ来てもらいたい」。「旦過市場

2008年10月20日 日本経済新聞

グローカル View

地域貢献、公立大が存在感

共同研究や公開講座などを大学の地域貢献が広がる中で、公立大学の活動が活発になっていることが日本経済新聞社の「公立大学

北九州市立大は近隣小学校の野球部員を指導

地域貢献度ベスト30

順位	大学名	国公私	偏差値
1	北九州市立大（公）	8	61
2	宇都宮大学（国）	1	73
2	千葉大学（国）	1	56
2	筑波技術大学（公）	3	59
5	帯広畜産大学（国）	1	39
6	岩手大学（国）	1	52
6	信州大学（国）	1	62
8	長崎大学（国）	1	60
8	梅光学院大学（私）	3	50
10	鳥取大学（国）	1	61
11	茨城大学（国）	1	58
11	横浜国立大学（国）	1	61
11	三重大学（国）	1	60
14	豊橋技術科学大学（国）	1	67
15	鳥取大学（国）	1	60
15	滋賀大学（国）	1	47
15	三重大学（国）	1	60
15	広島大学（国）	1	67
15	岐阜県立看護大学（公）	3	47
20	和歌山大学（国）	1	60
20	愛媛大学（国）	1	60
20	東北公益文科大学（私）	3	50
20	立命館大学（私）	3	61
24	北見工業大学（国）	1	50
24	富山大学（国）	1	60
24	鳥取大学（国）	1	60
24	島根大学（国）	1	60
24	県立広島大学（公）	3	50
29	名古屋工業大学（国）	1	67
29	愛媛大学（国）	1	60
29	東北福祉大学（私）	3	50

（注）国＝国立大、公＝公立大、私＝私立大。空欄は未回答

本社調査 文化や技術 幅広く

共同研究や公開講座などを大学の地域貢献が広がる中で、公立大学の活動が活発になっていることが日本経済新聞社の「公立大学の地域貢献度調査」でわかった。首位は北九州市立大で、昨年に続いて上位の四項目を占めた。

今年で三回目。八月から九月にかけて、全国七四三の公立大、私立四二二の大学に調査を送り、二十二日までに六六%の回答を得た。

調査は地域貢献活動の実績に応じて、教育・研究・地域貢献の三分野で、学生の地域活動への参加状況や、地域貢献を目的とした公開講座の開催状況などを調べた。

北九州市立大は

ぬか漬けに恋をした

記者が「奥深さ」体感

「わが家の味」へ 根気とカン

西鉄豊さん（右）が指導で、ぬか漬作りに挑戦する「ぬか漬け教室」の受講生＝福岡市博多区の西鉄ガスのリビングスタジオ。（撮影時禁煙）

微生物にうまみの秘密 ■腸の免疫力向上

小倉に根付くぬかみそ炊き

西日本新聞 2008年7月8日

北九市立大生奮闘 大學堂がオープン

日過市場の情報局に活用

日過市場の「大學堂」で開かれた三線コンサートから日足後の時ごろ、北九州市小倉北区

雑貨販売、音楽、演劇多彩に

毎日新聞
2008/10/16 朝刊

ふれあい残る専門店街

写恋09

日過市場

北九州どこが好き？

大学生と経営者ら意見交換

第七章

◆ イチバのなかの大學堂　覚書

（重信　幸彦）

◆ イチバという場所

イチバ、という言葉を耳にして、からだの奥底から気分が高揚しないひとは、既に昨今の消費者中心主義の「快適システム」に飼いならされてしまっているひとである。

古い言葉で、イチが立つ祭礼をマチとよぶ例があり、民俗学では、現在の「街」という言葉と、「市」という言葉は、歴史の深いところでつながっているという説がある。

ふだん出会わぬ見知らぬ者同志がつどうこと、珍しいモノが集積し交換されること、耳慣れない言葉に出会うこと。それらは、いずれもイチとマチの原初的な活力のみなもとである。場合によっては、山姥に出会うという神秘的な言い伝えを持つイチもあった。そうしたイチは、誰かが計画してうみ出すのではなく、川岸や浜の荷降ろしの場や中洲、集落のはずれなど、誰が使っても文句を言われない、「余白」のような場所に自然と出来上がっていったものが多い。

ところで、我が旦過イチバは、今なおこうしたイチという場の原初的な雰囲気を宿している。言い伝えでは、既に大正時代に船の荷降ろしの場がイチの様相を呈し、終戦直後から川の上にまでせり出して、いつしか現在のようになったという。皆が集い、小倉の発展とともに作り上げてきた街の暮らしの心臓部だ。そして、旦過イチバの東に鎮座する稲荷社には、いつしか火事と火防せの伝承がまとわりつき、ちゃんと神秘的なシンボルの一つになっている。旦過イチバは、正しいイチバなのである。

しかし往々にして現代の僕たちにとっ

て、イチバは、初めて足を踏み入れると迷路のようでデパートほどわかりやすくはなく、また買い物をするには相対のやりとりが必要で、ショッピングセンターほど気軽でもない。そう感じてしまうのは、実は僕たちが、それぞれの個性を持つイチバを使いこなせるようになる手間を厭い、相対交渉を煩わしく思うまでに、「快適システム」を当たり前なものとして身に刻んでしまっているからだ。そんな僕たちは、イチバが宿す力を枯渇させ、そこを単なるショッピングセンターにしてしまいかねない。現在のイチバという場所が危機を抱えているとするなら、そうした僕たちのありかた自体が、その危機の正体なのだ。

職場の同僚、竹川大介氏が、旦過市場に関心をいだいたのも、彼が人類学者としてイチバという場所が持ちうる可能性を熟知したうえで、イチバの元気こそが、

「快適システム」に安住する僕たちの現在の危うさをうつことができると確信したからにちがいない。

◆「大學堂」という名前

「大學堂」という名前が使われ始めたのは、たしか二〇〇六年二月のイベント「食市食座」のときのことだったと思う。前年の二〇〇五年秋に、それまで北九州市内の市場を探索し続けていた竹川氏が、旦過市場と大学とのコラボレーション企画として公開講座を実現した。その公開講座に混ぜてもらった僕は、一回だけ市場の二階にある事務所で講演をした。そして、年が明けた二月の食市食座の時に、学生たちが特別メニューの一品をつくって売り、さらにどういう経緯だったか竹川氏と僕は、一〇分間講義を売ることになった。僕たちは各自五種類ずつ一〇分間講義を準備し、竹川氏は当

日、サイケデリックな講義メニュー板を作ってきてくれた。そこに、「大學堂」と記されていた。

そして僕たちは、用意されたマントをはおり、お客様のオーダーを待った。それは実にスリリングな、そして冷や汗ものの経験だった。学生たちが売ったおかゆの椀を手にしたオバサマたち数人が、「へぇ、講義…」と言いながらメニューを指さす。前日まるまる使って仕込んだ五つのネタのうちの一つ。幅一・五メートルほど、奥行き五メートルほどの狭いスペースで、「講義」が始まる。大学で、黒板を背にして一段高い場所から学生たちに向けて話すのとは、全く勝手がちがう。まさに相対、一〇分間という短い時間と狭いスペースのなかで、相手の反応がこちらにダイレクトに突き刺さる。この一〇分間三〇〇円という値段の講義が、果たして目の前のお客さんにとってリーズナブルだったか否か。

こうして、教室から引きずり出された僕たちの講義は、大學堂の商品として市場で売られたのである。

何人のひとが僕の講義をオーダーしてくれたか、竹川氏と僕と、どちらのオーダーが多く、どちらの評判がよかったか、それは内緒である。少なくとも、僕にとってそれは新鮮な、そして実に楽しい経験だった。市場で講義を売るなど、極端に見えるかもしれないが、教室という、教員が学生との間に維持している権力関係の殻を引き剥がされたことで、「大学のことば」は実に風通しのいい場所に置かれることになった。それが新鮮だったのだ。

僕の記憶のなかでは、それが「大學堂」の始まりだった。

竹川氏は、きっとこの時の経験がやみつきになったのだろう。元気のいい旦過市場の皆さんや、大学と学生そして市役所を巻き込んで、二〇〇八年に「大學堂」という「商学連携」のスペースを、旦過市場のなかにオープンしてしまったのである。

◆「大學丼」という白い「余白」

学生たちが、交替で一日店長を勤め、「大學堂」という店／見世をあける。なにかを売るというより、なによりも旦過市場のなかに一つの「余白」が生み出されたのだ。学生を中心に大学がその「余白」でなにをするか、また一方、旦過市場の皆さんや、市場を訪れるお客さんたちがそこをどう使うのか、それは可能性を宿した「余白」に他ならなかった。

ふらりと立ち寄って休憩していく買い物客たち、捨てるにしのびないレトロな古道具を、飾りにと持ってきてくれるひと、そして、草笛のやり方の教室が開か

れ、書道教室が開かれる、イベントのチラシを置いてほしいと託すひと、店の忙しい時に少しの間お守りをしてほしいと言って子どもを連れてきた市場のひと…あるときは休憩所、あるときはレトロな道具の陳列所、またある時は託児所であり寺子屋、あるいはアットホームなカルチャースクール、そして情報の交差点。

学生たちが語る大學堂の風景には、大學堂という「余白」が、実にいろいろな顔を見せていることがあざやかに浮かび上がった。

「大學丼」は、そんな「余白」のなかで学生たちが考え出したアイディアの一つだった。大學堂で丼にご飯を盛ってもらい、あとはお客さんが各自、市場の店々をのぞきながらほんの少しずつおかずを買い、どんぶりにのせてもらうのだという。大學丼はそのひとのオリジナル、理屈の上では二つと同じものはできない。

まず学生たちは自分たちでそれぞれ大學丼を作って、写真を撮った。パソコンのなかに収められた彼らの「作品」を見せてもらう。色とりどりの丼を前に、学生たちの「丼語り」が始まった。自らの海鮮丼のコンセプトを語るもの、から揚げの旨い店について語るもの、具材を綺麗に丼にのせてくれる店を語るもの…、一つ一つの丼のなかに、一人ひとりの旦過市場の発見とこだわりが編み上げられていた。

二〇〇九年二月の食市食座では、この大學丼を一つのメニューとして供し、さらにお客さんにその丼を語ってもらおうということになった。多数の事例を集めることはできないかもしれないが、市場を訪れたひとたちが丼を片手に、市場とどのように出会い、接し、市場の人々とどのようなことばを交わし、そしてどのような発見をしたのか、一つの調査にも

なると考えたのである。

そしてこの大學丼は、旦過市場にできた「余白」の可能性である大學堂にふさわしいメニューだ。白いご飯だけを盛った丼は、白いキャンバスのようにそれぞれの旦過市場を描きこめる「余白」に他ならないからだ。

◆ 丼と火、そして大學堂

二〇〇九年二月四日夜七時、本番の食市食座を三日後にひかえ、旦過市場の事務所で、定例の大北九州市場学会の会議が開かれ、食市食座に向けて学生と市場の役員の皆さんとの最後の打ち合わせがおこなわれた。僕は、バヌアツの調査に行って留守だった竹川氏の代わりに、初めてこの会議に参加し、学生と旦過市場の皆さんのやりとりに耳を傾けていた。

「商売は、木と同じだよな、根こそぎ切ったら終わり、毎日の積み重ねだから年輪がある」

「皆、伊達や酔狂でここで商売してるんやないんよ、ちゃんといろんなツテを持ってやっているんよ」

「売り上げが上がらないために、状況とかいろいろなことを言ってはいけない、商才のなさを言っているようなもの、もう二つのあがきをしたい、個人個人ちがうけど、そこにお互いの競争がある、だから魅力のある市場になる、で、大學堂はどこと競争するの」

「こういうのって、継続していくもんやろ、継続したいと思うならば、それなりの働き方、考え方があるだろう、言える場所はここしかないぞ、言いたいこといっぱいありそうなんだけど、言わないでいるんだと思う、それを言えるようになってほしい」

「学生のころ、オレ、社会のことなんか知らんかった。学生のときに、こんなことが出来るってすごいことだと思う、せっかくここに来ているひとには、いい体験してほしいと思っている、そうじゃなければ、プラプラしているほうがいいのよ」

「俺のほうがもっとチャラチャラしていて、めちゃくちゃ遊びましたよ、チャラチャラむちゃくちゃしました、今は、

もうその恩返しをしようと思ってます」

「今からいいものになってほしい、それでイヤごとを言うかもしれんけど、よりよくしたいし、してほしいと思うんよ、互いに助けあいながらいきたい、がんばりまっしょ」

会議の過程のそこここで、集まった市場の皆さんから、自分の人生史語りの断片や、商いの経験に根ざした教訓や含蓄のつまったことばたちが、期待を込めて学生たちに投げかけられる。学生たちは、大學堂という「余白」のなかで、そんなプロフェッショナルたちに関わり、そのことばに触れることで、間違いなくひと皮もふた皮も剥け、自ら思考し自ら動く、たくましい存在へと育つ。

その日の会議のなかで、学生から「炙り」の火を置きたいという思いつきが出た。お客さんが市場で買ってきたものを、そこで炙って食べられるようになる、という。「炙り屋じゅうじゅう」、それは空いている店舗で毎日やってもおもしろいかもしれない、市場のひとたちも一気に盛り上がった。決定。炭火コンロの調達、排煙の工夫などがたちまち出され、学生のアイディアが具体化していった。

こうして二〇〇九年二月の二日間にわたる食市食座を迎えた。僕自身は、定期試験の監督や答案の採点を終わらせて、二日目に大學堂に顔を出した。

試験期間中にもかかわらず、ローテーションを組んだ学生たちが常に一〇人前後大學堂につめ、接客に大わらわだった。ある学生は休憩に来たひとたちの注文に応じてお茶ときな粉餅を出し、またある学生は炙りの火にホタテ貝をのせて、旨そうな香をただよわせていた。そして、大學丼に興味を持ち、おずおずと挑戦しようとするひとに、一人の学生がつきそって市場のなかに出ていった。また、暖を取りにきた中年の女性たちが、大學堂奥のこたつを取り囲んでわいわいと学生と話に打ち興じ、こちらでは市場を巡っておかずを手に入れてきた若いカップルが、店内のベンチに座って白い飯が盛られた丼にその具材を並べている。その傍らでは老夫婦が熱い茶をすすりながらきな粉餅を口に運んでいた。さらに店の外では、呼び込みの学生が、大學丼のポスターに見入るひとを、店内に誘っている。

残念ながら、たまさか顔を出した僕に、そこで出来そうな仕事などなかった。学生たちの邪魔にならないようウロウロしながらようやく見つけた仕事が、大學堂奥の流しに溜まっていく食器を洗うことだった。

この食市食座の大學堂で、ことに印象的だったのは、学生の思い付きから具体

化した「炙り屋じゅうじゅう」だった。市場の魚屋で買い物をしたひとが、今買ったばかりの魚貝を焼いてくれるか、と持ち込み、また大學丼を作ったひとが、大學丼にのせた具材を炙ってもらう。それは、そこに火があることで、大學堂そして旦過市場そのものの可能性が広がることを示唆していた。わたしたちにとって、現在の市場はもっぱら買い物をする場であり、買い物という行為は、どれだけ市場のなかをぐるぐると歩こうが、路上の延長上である市場を通過し購入した商品を自宅に持ち帰る過程に他ならない。

しかし「炙り」の火は、そうした通過の場である市場に、自分が買ったものを「市場で食す」という、「市場で過ごす」という別の機能を与える。「炙り」の火にのせるのは、魚貝でも肉でも、餅でも野菜でもかまわない。それは、あつらえられたメニューを備えた飲食店とも全く異なり、あくまでも自分が選び手に入れた食材を炙ることで、いわば市場そのものが簡易バイキング食堂のような場になるといってもいいだろう。

こうした火の存在こそが、市場で「味わう」という経験を具体化し、市場を集う場につくりなしていく中心になる。火が人類にとって持つ根源的な意義を持ち出すまでもなく、ひとが集うためには、そこに集ったひとたち自身が使える火が必要なのである。それは大學堂という「余白」に生み出された、ささやかな、しかし大きな可能性を宿した火なのではないかと感じている。

◆ 大學堂という力

これまで、竹川氏と彼のもとに集まった学生さんたち、そして市場の皆さんに混ぜてもらいながら「大學堂」の実践をのぞかせてもらった僕は、改めて「活性化」とはなにかを考え始めている。「活性化」ということばは、初手からモノ／商品やひとが早い速度で活発に動き、時間が滞ることなく更新していくことを前提にしている。その意味では、早い速度でたくさんのモノが流通し、競争のなかで変化していくことを是とする巨大な市場（シジョウ）経済のメカニズムに馴染みやすいことばでもある。

だから「活性化」とは、しばしば、出来るだけ「無駄」をはぶき、「短い時間の尺度」のなかで変化することを要求してくる市場（シジョウ）経済の仕組みに上手く乗り、世の中を「先取る」術を考え出すことを意味するように見えてしまう。

しかし、果たしてそれが「活性化」につながるのだろうか。

そもそも「無駄」とは何なのだろうか。

誰がそれを「無駄」と名づけたのだろう。そしてそれは、誰にとってどのように無駄だというのだろうか。僕たちは、なにかを「無駄」と名づける前に立ち止まって考える必要がある。また、数字を駆使して「未来」を予期し、時間を「先取る」ことが、しばしばわたしたちの暮らしを「短い時間の尺度」のなかに放り込んでしまう。すると「長い時間の尺度」のなかでゆっくりとうみ出され育まれるもの、じわじわと変わり動いてゆくもの可能性が、すべて「停滞」としてしか見えなくなる。

わたしたちの生身の身体と暮らしは、そんな効率性と「短い時間の尺度」のなかでのみいきいきするとは限らない。

小倉の街中の川岸に、誰かが机の上で計画したのでもなくかたち作られてきた旦過市場、そこに刻まれた歴史と知恵に、寄り添うことから拓ける地平があるにちがいない。

そして、一見、市場のなかの「無駄」のように見えるかもしれない大學堂は、実は、旦過市場が持つ多様な可能性を誘い出す「余白」として存在している。こうした暮らしのなかの「余白」をこそ活性化の力としてとらえなおしてみること、それが、大學堂が僕に教えてくれたことに他ならない。旦過市場を、効率性の高い単なるショッピングセンターにしてしまわないためにも、大学を単なる教育サービス機関にしてしまわないためにも、そして、街を単なる市場（シジョウ）経済のシステムの舞台にしてしまわないためにも、大學堂という「余白」が示唆する可能性を、大切に育む必要があるのだと思う。

結局、僕は、竹川氏が笛吹けど踊れず、顔を出せば市場の皆さんや学生たちの邪魔ばかり、ろくに役に立てなかった。しかし、顔を出すたびに、ひとり密かにわくわくしながら、そんなことを考えていたのである。

終章

◆ 大學堂はなにを「活性化」するのか（竹川　大介）

大學堂の一年目を終え、その報告書を編集する作業に入り、あらためて記録すべき事例の多さに驚いている。おかげで編集作業は予想以上に時間をとられてしまったが、読む側にとってもそれは同じだろう。ここまで読んでいただいたかた、ありがとうございます。

報告書としてつくられた文章ではあるが、できるだけ読み物としても面白いものにしたいということを、わたしはそれぞれの章の分担者にお願いした。文体や表現の統一は十分にはかられているわけではないが、それぞれの具体的な報告から、この事業全体の輪郭は見えてきたように思う。少なくとも市場の中にできた大學堂というたった一つの装置から、いかに多くの出来事が生産されているかを伝えることができたのではないだろうかと思う。

この報告書の最初にわたしは、大學堂のプロジェクトは支援でも再生でも街づくりでもないと書いた。では大學堂とはなんだろうか。その答えを探しながら、それぞれのメンバーが綴った記録を読みほどいていった。

「活性化」というのは不思議な言葉である。地域商店街の経済的な弱体化は、商店主や地域の問題によるものというよりは、ショッピングモールなど巨大な駐車場を持つ大型店舗が消費者を取り込んでしまった結果であろう。つまり一九九〇年に合意した日米構造協議による大規模店舗法の見直しこそが、そもそもの都心衰退の原因であり、この問題は、たぶん商店主のがんばりだけではどうしようもなく、国際政治を無視して語ることはできないはずである。

そうした見方からすれば、皮肉なことに地方行政が音頭をとる街づくりとは、こうした国家レベルの経済政策の免罪符のような役割を果たしているだけであるようにも感じてしまう。もし本気で商店街の再興を実現したいのであれば、いわゆる規制緩和政策の抜本的見直しをはかるのが一番近道なのだから。

しかし一方で、こうした社会をわたしたち自身が望んでしまっているという背景も無視することができない。すこしでも安く、すこしでも便利で、そしてなるべく手を患わせることなく物を買える商業システムを歓迎したからこそ、「便利なお店」という名の和製英語「コンビエンスストア」なんていうものが、どこの都市にも、いや田舎にさえも林立するこ

とになったのである。

しかし、どんなにコンビニエンスストアやショッピングモールが繁盛してもそれは街の活性化とは呼ばれない。不思議なことにこうした店が増えると街はかえって冷えていく。どうやら、経済的な取引が盛んになって、たくさんのお金が動くことがそのまま活性化につながるとはいえないようである。じゃあ、活性化ってなんだろうか、なにを活性化しなくてはならないのだろうか。

大學堂を通じてずっと考えていたのは、活性化すべきは街ではなく、わたしたちの方ではないだろうかということだ。市場は以前とかわらず十分に活性化しており、むしろわたしたちが活性化するのを待っている。活性化とは、ひとことひとのつながりだ。

関わりを持ちたくなるような装置を作れば、自然にひとは集まってくる。お客さんだけでなく、同じように街を楽しんでいるひとたちも、大學堂が出す独特な匂いにさそわれて知らず知らずのうちに罠にはまっている。今年は大學堂のおかげで、研究室にいては決して出会えないような魅力的な人々に、出会うことができた。

わたしは大學堂を街のトラップだと考えている。物語を求め自分から他人の家を訪ねて歩くフィールド調査は非常に時間と手間がかかる作業である。しかし大

學堂では、あろうことか向こうから物語がやってくるのである。フィールドワーカーにとってこんな貴重な場所はない。

ただ、ひとつ残念だったのは、もともとの運営母体である北九州市立大学の大學堂運営実行委員会があまり機能しなかった点だ。毎月定例の大北九州市場学会の会議をメールで案内したが、充分な参加は得られなかった。気づけば古くから市場に関わっていた重信氏ひとり、ほかのメンバーをトラップにかけられなかったのは、大學堂の運営で唯一のわたしの誤算である。

大学の教員という生き物は、市場などという世俗にまみれた場所には足を運ばないのだろうか。いやいや、そんなはずはあるまい。ぬかみそだきを買うついでにこっそり大學堂を偵察し、小声で応援してくる声はたくさん聞いた。おそらく彼らはいくぶん慎重にうまれついているのだ、あるいはちょっと臆病なのかもしれない。

雑務で忙殺される今の大学は、研究もさることながら、ますますひととの関わりが少なくなっている。どうやら大学の活性化こそ、むしろ市場の前に推進すべき事業だったようだ。

一方で、九州大学の藤原惠洋研究室、九州工業大学の仲間浩一研究室など、別の大学の教員たちが大學堂を面白がり、学生たちとともにしばしば訪ねてきてくれた。来年度の運営実行委員会は、北九大学内にとどまらず、市場という舞台で実際に動けるひと、楽しめるひとを中心に再構成したいと考えている。

ところで、この報告書を作成し大學堂の店主をしていた学生たちの多くは、九州フィールドワーク研究会のメンバーである。九州フィールドワーク研究会は、フィールドワーク研究に興味をもつひとたちが社会人、学生を問わず集まる研究サロンであり、近年は環境省の石西礁湖サンゴ礁環境社会調査や、国際協力機構JICAのバヌアツ草の根資金援助、スタードームのワークショップなど、数多くの調査研究事業を手がけている。

わずか十数人のメンバーですべてのプロジェクトを切り盛りするのは並大抵のことではないが、彼らはさまざまな機会を通じて大学生とは思えない高度な実践的スキルを身につけている。そんな彼ら

が限られた時間をやりくりしながら大學堂を運営していたのである。

また私自身も昨年の一一月よりＪＩＣＡのプロジェクトに参加するため、四ヶ月間バヌアツ共和国に滞在し、大學堂の現場を離れていた。しかしその間も、大學堂は活発に動き続けていた。

ふだんあまりひとを褒めない私だが、フィールドワーク研究会の学生たちが市場の人々からプロ意識を学びながら成長する姿を、私はなによりも頼もしく思っている。大学人としての幸せを二つあげるならば、自分の研究が未知の壁を乗り越えた瞬間と、好奇心あふれるいきいきとした学生たちとともに過ごす時間だろうと思う。

最後になったが、この事業を進めるにあたり非常に多くのひとの力を借りた。特に、時には厳しい意見を交わしながらも、辛抱強くわたしたちの試みを支え、さまざまな新しい企画を寛大に受け入れてくださった旦過市場のみなさんには感謝の言葉もない。大學堂の存在が少しでもその厚意に対するお返しとなっていればなによりの幸いである。

本来であれば大學堂を助けて頂いたひとりひとりにお礼の言葉を書くべきところではあるが、お名前をあげることでおゆるしを願いたい。しかもこのリストは完璧ではない。大學堂のメンバーできる限り思い出してもらったが、そもそもお名前をうかがっていないひともいるし、編集作業の手違いで漏れてしまったひともいる。リストに載っているひとも載せ忘れてしまったひとも（ごめんなさい）、さまざまなひととの出会いがこのプロジェクトの宝であることを再度強調して稿を閉じたい。

松商店
EL (52) 881
NEO LIME

たくさんの方におせわになりました

［大學堂改装］

栗山　照弘

近藤　史晴

高橋　明歩

田端　宏美

バット

［大學堂実習］

薮田　慎司

［落語興行］

竿屋　青竹

山椒家　小粒

みちのく　小雪

山根　浩二

［ガリ版ジオラマ展示会］

岡部　和慶

［エコバック製作講習会］

横山　淑子

［バイオリン演奏会］

谷本　仰

［絵手紙展示会］

岩田　千明

［みやま市物産展］

みやま市のみなさん

［クラシックコンサート］

楓雅

［市場調査］

栗山　喬

仲間　浩一

［太鼓演奏会］

GONZO- 夢 s

［試食隊］

北九州青果

［草笛教室］

矢野　郁子

［家主］

株式会社　ハローデイ

一　雪則

［大學堂のご近所さん］

宮本のおいちゃん

佐川ご夫婦

ちりんちりん豆のおばちゃん

川上ご夫婦

岡崎のおいちゃん

勉強屋のおいちゃん

［大北九州市場学会］

今井　嘉巳

黒瀬　善裕

伊達　弘勝

田中　誠一

中尾　憲二

中村　真

森尾　和則

重信　幸彦

（順不同・敬称略）

あるときは小物屋さん、またあるときは大学の講義室、音楽堂、お芝居小屋、画廊と折々に装いを変えて、昭和の薫りただよう旦過の町をますますにぎやかにします。

◆歴代店長（五十音順）

赤崎 時子
赤松 徹生
穴井 光子
有松 未央
有松 由衣
池田 和弘
井上 広平
今田 文
岩下 均
大石 厚生
大久保 大助
大嶋 雄治
大津留 香織
金子 有李
北原 聡子
木下 薫
木下 靖子
吉柳 佳代子
黒田 陽子
小松 良子
皿海 弘樹
進藤 英朗
進 麻菜美
須藤 康之
平良 一樹
高島 光
高瀬 靖史
高柳 亮佑
竹川 大介
谷瀬 未紀
堤 高太郎
照屋 優海
中尾 一徳
原口 勇希
原田 萌
牧野 岳人
松原 緑
宮村 早貴
向井 朝弘
宗像 里美
命婦 恭子
山田 洋
山城 若菜
吉岡 美紀
David Neil McClelland

◆イラスト
竹川 玄之介
木下 靖子
大久保 朱乃

◆デザイン
竹川 大介

北九州市小倉北区魚町4丁目4−20
旦過市場
大學堂

skype:daigakudo.net
daigakudo.net@gmail.com
http://www.daigakudo.net/index.html

「大學堂と市場劇場」

◆編集◆
大學堂運営実行委員会
北九州市小倉南区北方四の二の一
北九州市立大学　竹川 大介
〇九三-九六四-四一六七

◆発行日◆
二〇〇九年三月三一日

◆発行◆
野研出版

大學堂は北九州市立大学と旦過市場の商学連携による共同事業です